

誌雜究研の居芝

類類類

輯六十三百第・年三十第

昭和二十三年十月廿五日第三種郵便物認可
昭和二十三年一月十八日印刷（毎月一回）
昭和二十三年一月十五日發行（毎月一回）
「類類類」第百廿六號 第十三年



特輯・とら百題

下三
あ

新國劇

大八満買御禮

次郎長の戀と仁俠篇！辰己島田のコンビに隨所に見せる大殺陣こそ一座の獨壇場忽ち！！新春の人氣を獨占してこの大評判

辰己の次郎長賣出しに島田の石松大熱演

清水次郎長 四幕七場

島田、辰己を始め一座總出演の本格的喜劇

巾着等失ふと七 二幕四場

秋月正夫と青年座員の大合唱

愛國行進曲合唱

◆新年の御會合にはお徳な觀劇會を！！

御食事附觀劇券發賣 一人様 三円三十錢

◆お場席 一等席・御食事 洋食又は和食・繪本畫附記念繪葉書共
◆お申込みは 二十人様以上・前賣團體專用電話（戎）二六六一八

一月九日まで
と日曜は
晝十二時二回
夜五時半開演
平日は
五時開演

御觀劇料	櫻	菊	三	二	一
	四十錢	七十錢	九十錢	一円三十錢	二円五十錢

◆場劇い暖・備完房暖◆
大阪 歌舞伎座

天然鰻の味。

日本料理の粹

竹茶亭

南店（湊町）北店（堂島）共

金ぶら壽しも致しております

本亭 瓦町（大手橋西詰）
電北濱 一七〇八

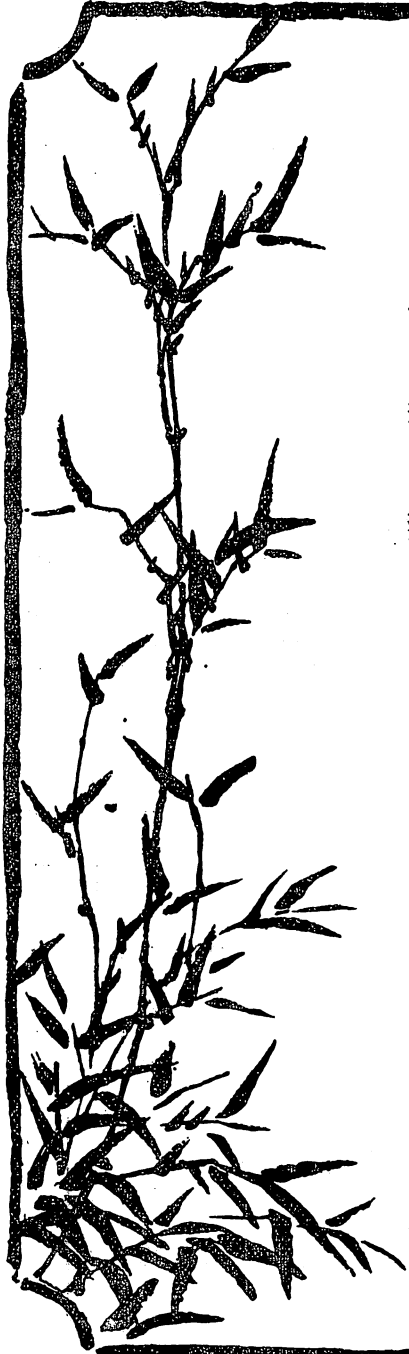
南店 湊町驛前（阪急ビル）
電櫻川 二三五三

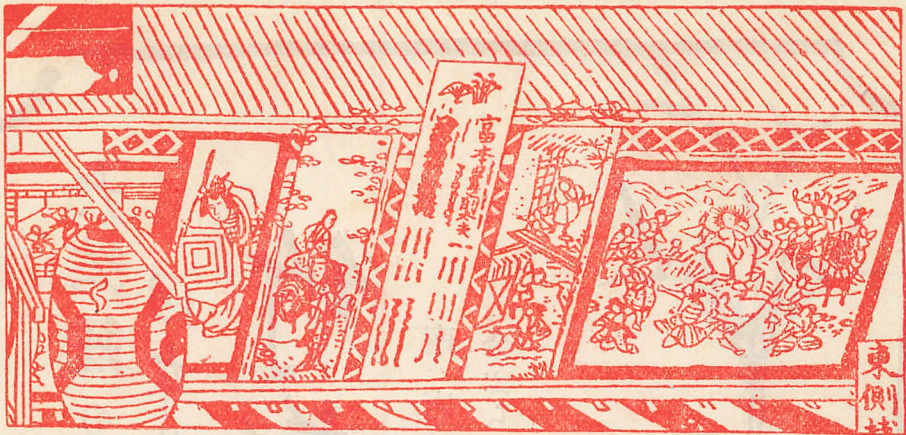
北店 堂島（渡邊橋北詰）
電北 四六二九

梅田阪急百貨店（七階食堂）

日本綿業會館（地下食堂）

戎橋三笠屋（二階食堂）





東側林

◇道頓堀 新春號 目次◇

表紙……………吃又………妹背平三

フ ラ グ

- …中座大歌舞伎——鏡山舊錦繪・竹通一節・須磨都源平躑躅・夜明前・勢州阿漕浦・芹分鶴
- …角座關西新派——新藝者讀本・錦の榮光
- …浪花座大船の實演——かりそめの花嫁とスナツプ
- …歌舞伎座新國劇——清水の次郎長・我等失ふとも・愛國行進曲
- …文樂人形淨瑠璃——名筆吃又平・花くらべ・天網島時雨炬燵

戰捷新春を迎へて……………白井松次郎(三)

日頃の訓練……………白井信太郎(三)

皇紀二千五百九十八年……………依藤丈夫(六)

新春希望……………中山楠雄(七)

勝鬨初芝居……………入江來布(四)

とらの氣焔……………市川小太夫(二〇)

寅年の戯書……………市川箱登羅(三)

トラの逃げて……………丸茂三郎(三)

蔭介石……………河原崎長十郎(三)

虎は手につけられぬ……………畑中藁坡(四)

幕間隨筆……………森中藁坡(四)

虎と酒と娘……………秋月正夫(五)

飲酒家駄言……………與志雄(六)

(同不次順)



阿漕と扇屋巖谷……………高谷 伸 (四六)
 實 說 鏡 山……………梅 徑 莊 主 (四九)
 虎の 出る 芝居……………森 ほのほ (三二)

當 歲 壽 三 虎 傳……………菱 田 正 男 (二九)

敏 夫 ち や ん……………食 滿 南 北 (三四)
 昨 年 度 の 役 々……………花 柳 章 太 郎 (四三)

松 蔦 さ ん は 語 る (座 談)……………東 竹 舍 人 (四四)

萬 才、故 郷 と 國 鏡……………松 竹 亭 ウ メ マ ル (二五)
 當 る 寅 歲 漫 畫 芝 居……………笑 亭 ニ コ ニ コ (二六)

干 支 役 者……………大 槻 た も つ (三七)

萬 才、虎 の 卷……………酒 井 七 馬 (三七)

松 竹・新 興・映 畫 回 顧……………ク エ ン タ ャ 子 (三八)

◇ 芝 居 素 描……………大 友 柳 太 郎 (一九)

昭 和 十 二 年 の 芝 居 と 今 後 の 希 望……………渡 邊 紫 染 (六一)

春 の 中 座……………大 橋 孝 一 郎 (五二)

中 座 古 狂 解 題……………世 話 垣 鈍 文 (五四)

左 團 次 の 代 役……………坂 本 猿 冠 者 (六四)

劇 文 壇 二 人 上 等 兵……………豊 田 豊 (五七)

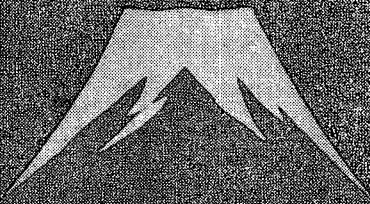
新 春 獻 酒……………實 川 延 若 (五五)

ハ リ キ リ 新 春……………嵐 吉 三 郎 (四一)

飲 み 友 達……………榊 本 綠 之 助 (五四)

カ ッ ト……………正 げ 人 樹 た 生 生

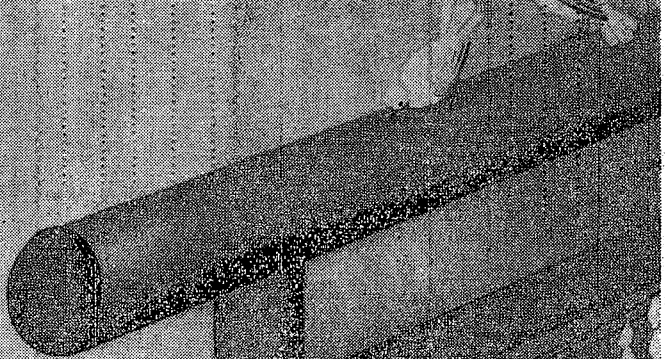
★ 編 輯 と 後 記……………源 多 德 三 郎 (六六)



銘酒

白
雪

摂津伊丹灘 小西酒造株式会社



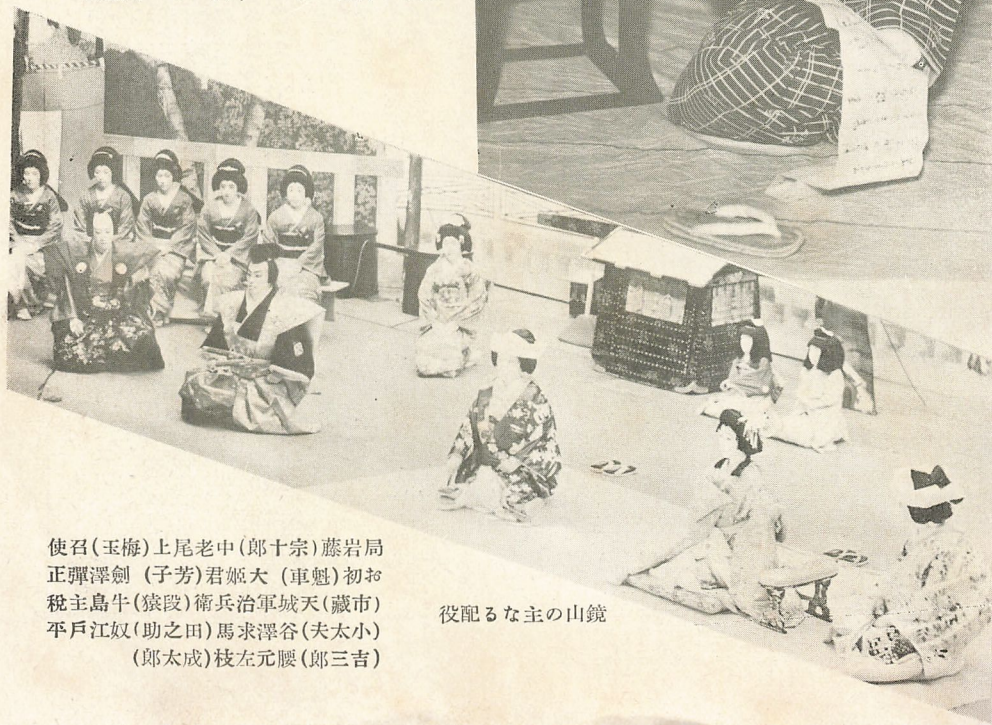
座中の春初

物々しくも、張切つてゐる。
 まさに堂々の陣容。關西歌舞
 伎の意氣をみよや——とばか
 りの大阪方の力闘に伍して、
 宗十郎他東京勢の活躍も目覺
 しい。狂言立てもよし、先づ
 好劇家は歩をはこぶべし。



脚にり振年十まい “繪錦舊山鏡”
 作表代の言狂伎舞歌るび沿を光

村中 (中) 上尾老中の玉梅村中 (上)
 面臺舞のそ (下) 初お使召の車魁



使召(玉梅)上尾老中(郎十宗)藤岩局
 正彈澤劍(子芳)君姫天(車魁)初お
 稅主島牛(猿段)衛兵治軍城天(藏市)
 平戸江奴(助之田)馬求澤谷(夫太小)
 (郎太成)枝左元腰(郎三吉)

役配るな主の山鏡

中座の大歌舞伎

(下) 須磨都源平躑躅

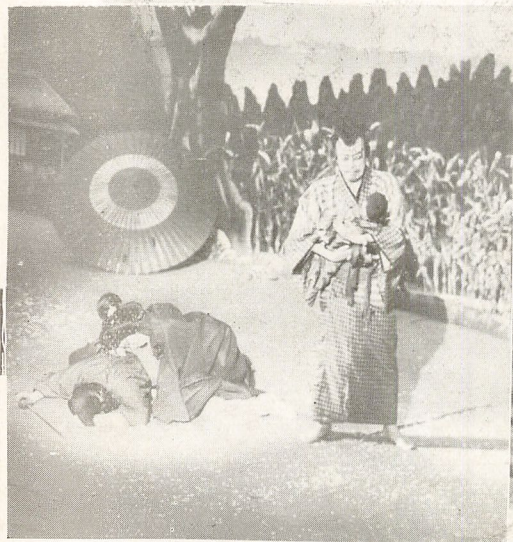
三十年振りて、道頓堀に上場された勇壯舞臺。主なる役は熊谷直實(延若)扇屋上總(市藏)堤軍次(田之助)姉輪平治(小太夫)木鼠忠太(箱登羅)娘桂子(成太郎折子)お珠敷(延三郎)折子お竹(右之助)折子お廣(吉三郎)扇打實は敦盛(宗十郎)

(左) 所作 松廼羽衣

風早の三保の浦浪おだやかに…と、天津乙女(魁軍)漁師伯了(田之助)三保次(敏夫)で天人羽衣の所作事



作所 (右)
節一廼竹ク
の後越りちつえ
維樂神てえ越坂
干るぐめ々町で
藩兵角。春初の
太女(夫太小)子
(子芳)



前明夜 本脚賞懸演上郎三壽東阪(上)
…眞の侍るき生に義大てえ越を慾愛轉流
浪男女(助之田)郎太新口關(郎三壽)吾東田原
評好に演力の他(子久嘉)路





爛絢もくし妖 “弦梓糸蜘蛛”

時金田坂(藏市)網邊渡(若延)光頼源
武季部卜(助之田)光貞井確(郎三壽)
小城傾(子芳)にがゝき造新(郎三吉)
(郎十宗)精の蜘蛛 市之福頭座 蝶



“浦漕阿州勢” つ一の粹生の劇典古方上

(郎太成)春お房女(郎三壽)治平漕阿(若延)藏郎治瓦平(は役るな主
(車魁)庫兵村奥(羅登箱)作彦屋庄



船場繪卷 “若分鶴”
の舞臺面です。
主なる役は御高祖頭巾の女お
ぬい(梅玉)紀國屋女主人おれ
ん(魁車)養女おまち(芳子)三
河屋市郎右衛門(壽三郎)番頭
助七(段猿)若い者次郎吉(壽
之助)新宿屋治助(扇)玉津屋
三郎右衛門(八百藏)旅の男東
藏(市昇)江戸屋善兵衛(宗十
郎)



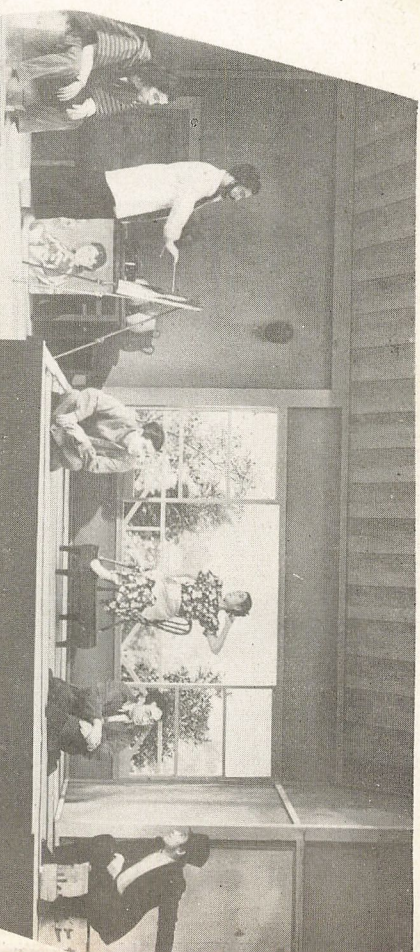
①②③④⑤ 大阪日日新聞連載大木戸徹原作、島江鏡也
脚色並演出 **新藝者讀本** の主なるシーンであ
ります。梅野井の藝妓春代、都築の平尾、中田の村咲
瀧の美子、村田の別宮、岡本の村咲長男、六條の百合
家女將、宮村のお樂、若葉の音丸その他の活躍は、花
柳界の戀と意地を描いて妙。

⑤ 幕末もの **錦の榮光** 〃 寫眞は梅野井の旅藝者お
紺と明石の舊幕臣關半九郎



大 船 の 演 實

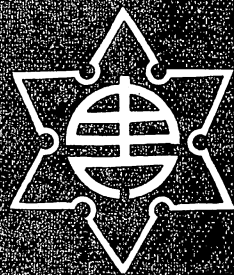
大川夏・仲寺大徳・二周野佐・信利分佐・謙原上ータヌの船大
 日一十リよ日五春新 はら苗早杉高・衆智笠・明敏衛近・郎二
 演上を、嫁花のめそりか」にソヨシクラトアの座花浪でま
 と出演な格的本の川夏でま頃半時三らか前時二十夜の日四
 ブツナスの夜當は眞寫。たけどつを古稽臺舞に果効の原上
 で方るおて見、えみにうさむ寒で着すうが杉高、がるおて
 。たれらせさラハラハと「が、い、い、や、き、な、か、ひ、を、邪、風、」



大船の演實 「かそり花の死の又吃」

つ知もし誰、らな家劇好、らな年青學文。るあて演上の格本の
 。だ物し出な損はてしとソヨシクラトア、がるあてのもるおて
 は野佐。るおてみでん喜がも誰にキヌ窟理、で氣人たし大がだ
 以豫想は杉高點一紅、が、い、し、か、つ、な、て、出、て、マ、チ、が、味、る、み、で、高、映、
 。イ、マ、ウ、に、上、

浪 花 座 公 演



大阪一の愉快な
明るい新聞

大勝福小判

年中無休

購読料一ヶ月
金五拾錢
一部 金貳錢

住吉神社 戦捷祈願

本社主催

大勝福小判 贈呈

大當り純金小判・純銀小判

日は…はつ春、十一日より四日間

所は…住吉神社境内にて漏れ無く

皇軍大勝の新春を迎へて本紙愛讀者待望のはつ春の福
運、住吉神社において参詣者全部に(住し南海電車(本
線)難波、今宮或(阪増線)惠美須町(高野線)汐見
橋(上町線)天王寺驛前各驛より住吉神社往復切符お
買求めの方に限る、この往復乗車券には小判引換券が
ついてゐます)贈る福小判は今年に特に住吉神社で戦
勝祈願をこめた「大勝福小判」といふおめで
たいものです尚この大勝福小判が全部當つた上に
福引にて期間中毎日純金小判純銀小判が多
數當ります。はつ春々の福運を引きあて、下き
い(期間は一月十一日(初卯)十二日(初辰)十三日
十四日の四日間、引換時間は午前七時より午後五時
まで場所は住吉神社境内給馬堂にて

魚川野 鱈魚
 料理 女米



柴藤 食堂

二階 椅子席
 三階 宴會場

電話南 四八一〇
 四八四四

日本工業新聞

頁二十 朝日
錢十銀門色月一

大阪新聞

日八 刊夕大
月々一

京 東

二町樂有區町麴
三一六六至一一六六自座銀話電

阪 大

四通濱島堂區北
一五七島福表代話電

建築請負業

合名會社 矢 島 組

大阪市南區高津八番町四番地

電話 戎 (76) 二二九九一三四番

謹 賀 新 年

◆不屈權勢、不媚富貴
 ◆議論公明、報道迅速

◆夕刊四頁發行



大阪市北區天神橋筋四丁目三六

發行所

大阪都新聞社

社長 南隅喜八

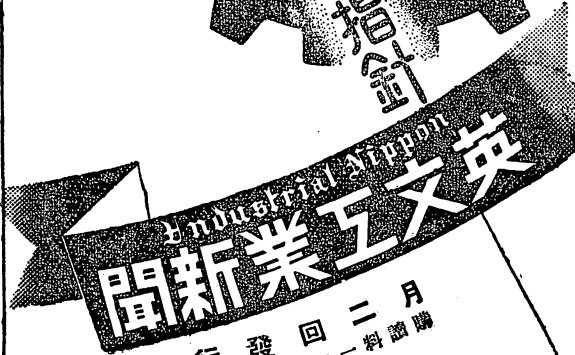
電話 天王寺(77)

三六一六〇番
 三三〇番
 六七〇番

創刊廿四年



優良工産品展示
商取引助長機關



二月發行
購閱料一ヶ月四拾錢

全每日
購讀料
三ヶ月
金壹圓貳拾錢
網二羅頁

東京銀座 日刊工業新聞社 大阪中之島

戦捷の新春を迎へ
謹て江湖の萬福を
御祝ひ申上げます

昭和十三年元旦

皇軍の
武運永く
初日の出



松坂屋

大坂日本橋



24

劇國新・座伎舞歌



當て込まない時局劇
ッわれ等失ふとも
 は既に年末、東京で演じたもので、好評噴々の故を以て大阪上演が決まったものだ。そのよきは察すべしか……寫眞は、
 (上)鳥田の南郷周平、(中)辰己の次男健次、(下)久松の相原泰子、二葉の姪朝子、加藤の娘



「われ等失ふとも、またすべてを得む」人々の天を冲するばかりの歡呼と嵐の如き激勵に應へて爰に藝術として、南郷健次は征途に上るのである。一介の商人とは云へ、烈々志士の氣概を持つ父周平を恥かしめない決意を胸に罩て――



自ら展いた新境地「新國劇の清水の次郎長」
に、今また新しく一鋤入れたのだ。小島政二
郎の新作清水の次郎長で、辰巳の次郎長、島
田の石松が大奮演だ。



金鶏印 罐詰 二大製品

- 1. 純良精選の牛肉
で御座います
- 1. 不意の御來客に
- 1. 御酒ビールの御友に
- 1. キャンピングに
- 1. ハイキングに
- 1. 各地百貨店
著名食料品店
に販賣致して居ります
- 1. キンケイ印を御指定下さ



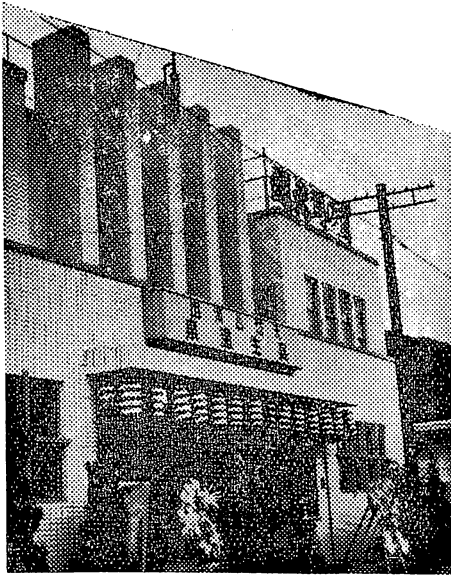
洋酒・食料品・罐詰問屋
 大阪市東區豊後町三番地
 株式會社 横山商店

團劇生長專屬

演 公 晝夜二回

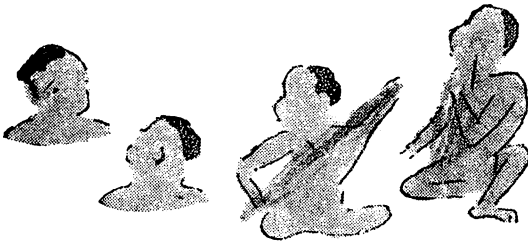
市內唯一の 天然湧出 長生温泉

お家族連れにて一日中氣樂に遊べる



備設大内場

- 大餘興場
- 娛樂室
- 大食堂
- 喫茶室
- 宴會場
- 拉球場
- 屋上運動場
- 特別休憩室
- 賣店等アリ



此花區四貫島嘉永町七
市電四貫島大通三丁目下北へ入ル半丁
電話土佐婦④三一九番

感じのよい和室洋室があります
御宴會(和食洋食一品料理)團體の御申込みは
何時にても御相談に應じます。

刊 夕



京都唯一
の赤新聞



都
日

京都御幸町三條南
電代表本局(2)六七六二番

謹
賀
新
年



株式會社

大阪朝新報社

大阪此市花區上福島一ノ七
電話代表島福(45)三五〇〇番
島福(45)六三九番・五〇二番
振替口座大阪 四二〇六番
私書函野田局二十二號

光は東方より

國家非常時

戰爭は是から

茜さす桃色新

聞必讀總動員

夕刊街頭將軍

躍動又奮迅

錦城 米田誠夫經營



「筆陣堂々天下無敵」
「正戰勇猛是日本一」

大正市東區北濱四丁目六番地

大正日日新聞社

番九四四一 番〇七二
番八九一二 番六四四一
番〇二八三 番六四四一
番八〇三四 番八四四一
番七八九二 番穴座口替

(23) 濱北話電

謹
賀
新
年

中央市場新聞

大阪市此花區大野町一丁目

中央市場新聞社

電話土佐堀

二七七
一七七
六七七
〇八七
番番番

一部二錢

一ヶ月五十錢



賀 正

本誌が獨り夕刊新聞として覇を爲すに止まらず全日本の新聞界に於ても鬱然として一大王國の觀があるのは單に面白いからのみではない、讀めば必らず胸奥を震撼させずには居ない感激と正義の文字で紙面が盛上つて居るからである。人情風俗の活映畫。財界の波。商機の動きには正確の羅針盤、讀みたい新聞、讀まねばならぬ新聞、讀まずには居られぬ新聞。……………

代 開 新
 錢 貳 部 一
 錢 十 五 月 一
 錢 五 十 稅 郵

料 告 廣 通 普
 圓 壹 行 一 欄 別 特
 圓 貳 行 一 欄 別 特

所 行 發
 濱 北 區 東 市 阪 大
 地 番 七 目 丁 四
 社 開 新 日 日 阪 大

瀧 北 話 電
 1101 • 1102 • 1103
 1104 • 1800 • 2600
 7 0 • 7 1
 用 送 發 付 受 間 夜
 1 0 1 1

新國劇の愛國行進曲

歌舞伎座の新國劇は、開場の冒頭に「愛國行進曲」を
秋月正夫始め青年座員大勢にて大合唱をする第一景は
舞臺一杯富士を見せ第二景には旭日に輝く日章旗を背
景として合唱、座員は國防服からヒントを得た制服に
身を整へ手に手に日章旗と獨、伊の國旗を持つて歌ふ
(寫眞は富士を仰ぐ場面)



文樂人形淨瑠璃



新春第一陣を北陽演舞場に、十四日より新町演舞場に第二陣を布く文樂人形淨瑠璃の活躍は寅歳にふさはしく目覺しい。
寫眞は上寅の一部「吃又」「花くらべ」「紙治」の舞臺



謹
賀
新
年



中
外
商
業
新
報
社
經
營

大
阪
北
濱

大時新報

躍進！
躍進！！

8

252

謹賀新年

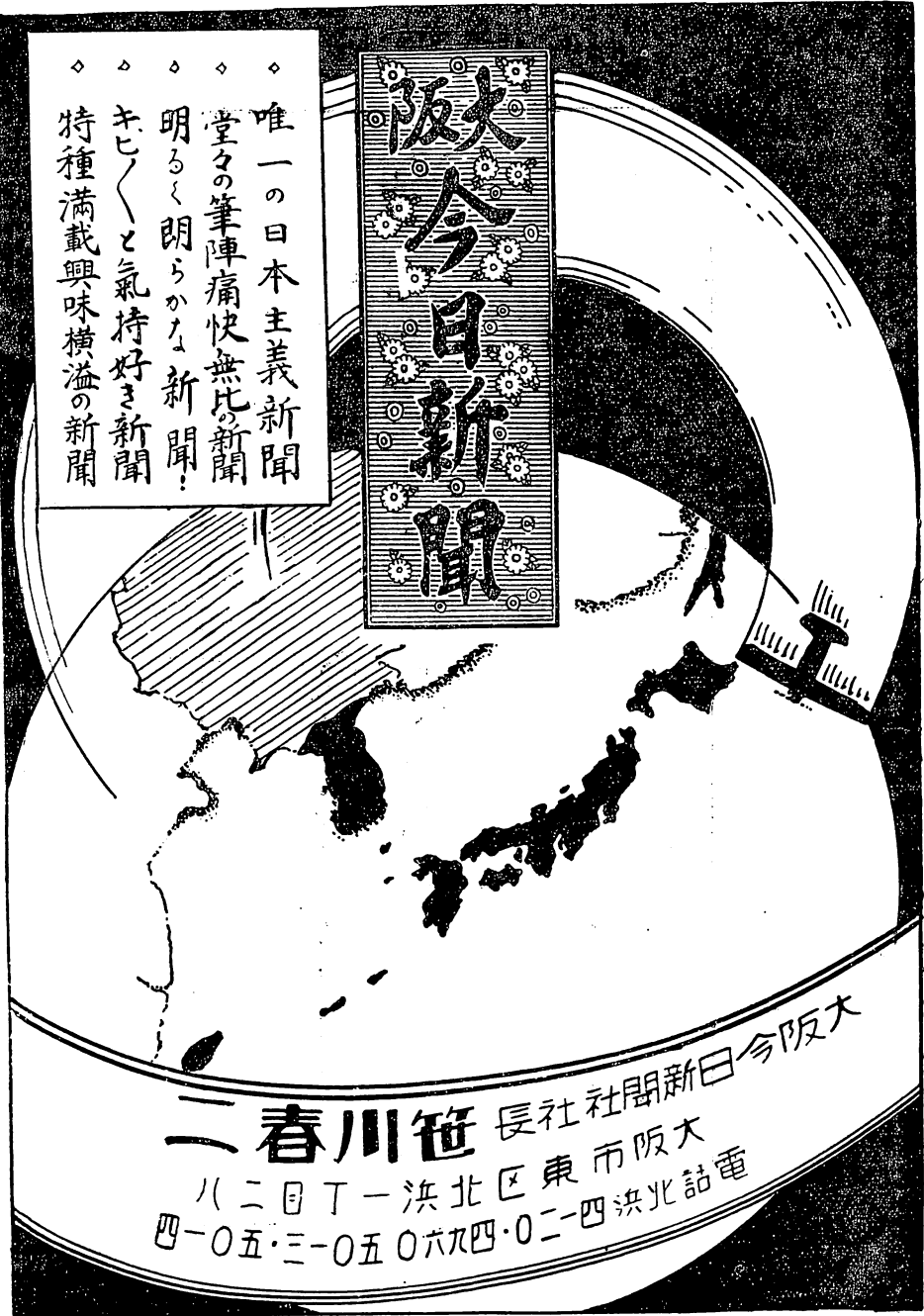
大阪市北區中之島三丁目

大阪電報通信社

社員一同

大阪
今日新聞

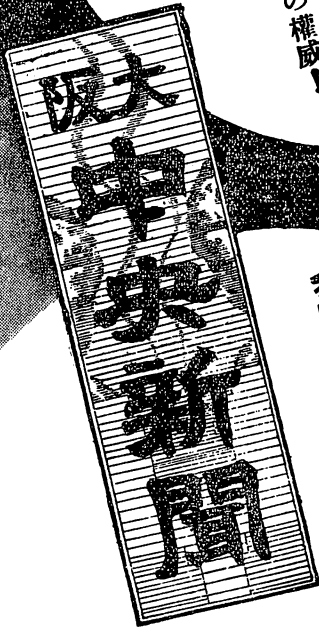
◇ 唯一の日本主義新聞
 ◇ 堂々の筆陣痛快無比の新聞
 ◇ 明るく朗らかな新聞！
 ◇ キビくど気持好き新聞
 ◇ 特種満載興味横溢の新聞



大阪今日新聞社社長 笹川春二
 大阪市東区北浜一丁目二八番
 電話 北浜四〇四・四〇六〇五・三〇五〇一



關西唯一の經濟新聞！
我が國證券市場の權威！



我が國最初の畫刊新聞！
朗かな晝休みの好伴侶！

株式會社 大阪經濟新聞社

大阪・東區・北濱
電話代表北濱一〇〇番

謹
賀
新
年

大
阪
商
業
新
報

社 長 越 智 南 海

大 阪 市 北 區 空 心 町 一 丁 目
電 話 代 表 堀 川 (35) 五 一 五 二 番

支 店 東 京 · 神 戶 · 奈 良

賀 正

實益記事滿載！
趣味讀物充溢！

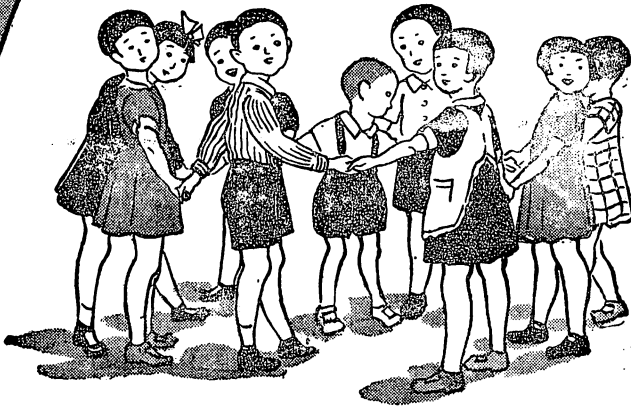


大阪市東區北濱二丁目卅一
電話北濱(23) 五二六六番 六一七番
五二六七番 七五七番

錢貳金部一・頁四刊夕

保険に愛を慈しむさまに

可愛い御子様方の爲に
生命保険に御加入下さい
それは親御様方の尊い愛
の發露でございます。



大 き く て 確 かな

日本生命

本 店 ・ 大 阪 今 橋

謹 賀 捷 春

津 村 英 夫

大阪西區辰見通二丁目

(電話茶屋 3678)

正

賀



株式會社

京華社

創業明治廿八年
新聞雜誌廣告代理
並ニ文藝通信

本店 京都市三條通烏丸東入

支店 東京市丸の内三菱廿一號館

支店 大阪市東區北濱四丁目

支店 神戸市神戶區榮町五丁目



宣傳廣告一般

アム士廣業社

道頓堀松竹座地下室
電話 南七九四七

スセロプ
作製板看術美

るゆらあ
廣告傳宣

社事商告廣

造勝中田

前日千阪大

番〇九七三戒電
ルクナミ

第十三年

月刊・演劇研究・雜誌

演劇研究

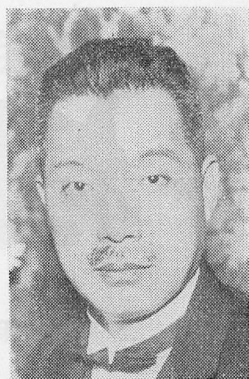
新春號

皇紀二千五百九十八年

戰捷の新春

萬歲萬々歲

寅歲元旦



戰捷新春を 迎へて

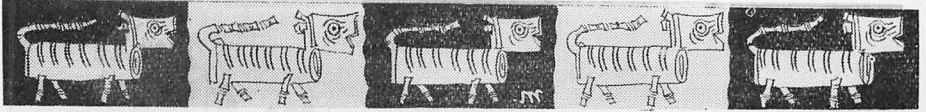
松竹 白井松次郎

皇紀二千五百九十八年の新春を迎へ、先づ明けましてお目出度うございます。今年は光輝ある日本歴史上特筆さるべき國威發揚の新春とでも申しませうか、誠に私共國民の光榮と歡喜に満ちた元旦でございます。この千載一遇の感激に浸りつゝ、私共劇壇映畫人は銃後の國民として精神總動員の御主旨を體し一層の緊張努力を以て新企劃を樹立したいと思ひます。

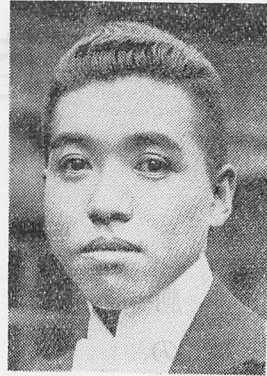
省れば昨年中の劇映畫界は眞に多事多端に終始し新時代への發展移行上、私共は色んな體驗を受けました。

事變を反映せる目醒しい現象の一つ、ニュース映畫館の輩出は都會文化の一端として今後益々その必要性を發輝するものと思はれます、また洋畫輸入禁止に依る邦畫界の活躍も豫想されますが、劇界の動向も國粹藝術たる歌舞伎劇の保存新劇の創造に劃期的な記録が期待されます。手近な話が我が關西歌舞伎も吉例の如く古式復興に日本精神の發揚を企圖したる狂言の配列を以て臨み、二月以降の上





半期に於ても鴈治郎追慕劇東京俳優優來演等の各ブランを練りつゝあり、新劇界も新人抜擢の英斷的興行を敢行文樂人形淨瑠璃の保存等以て戰勝新春に送りたいと存じます。



日頃の訓練

新興キネマ社長

白井信太郎

いざ戦ひとなつて始めて始めて平常の訓練と銃後の持久力が光り出します、眉に火がつく時分になつて幾等戦闘員に鞭うつても勝利は望めません、皆さんの御聲援に依つて凱歌を擧げる事の出来ましたのはたゞ日頃訓練されてゐたが、表面ににじみ出したものだと考へて居ります。三時間制も結構、外畫輸出禁期延長も此の際止を得ないでせう。

私共はこの重大な國民的試練期に際しまして、日本人である誇りに歡喜しつゝ映畫演劇のよりよき發展に邁進致し度い存念で一杯です。





勝 関 初 芝 居

入
江
來
布

御題に因む『松の羽衣』

神の松明けの富士見に初芝居

千支に因む『竹の一節』

寅の一天軍萬歳と初芝居

初芝居時世ときよに勇むむきほひにて

勝関のごよみにありぬ初芝居

武運文運藝も榮えて初芝居
むかしより文武の國よ初芝居
源平藤橘やまご錦を初芝居
茫乎ごしてむかしよ今よ初芝居
所作事の松に竹にや初芝居
吉例ごいふが嬉しや初芝居
初芝居 瞼にのこる扇折
初芝居大雅も手帖ふごころに
顔見世の霜をつぎつゝ初芝居
初芝居女なればの粧ひに
初芝居五彩の光りうつゝなく



皇紀二千五百九十八年

俵 藤 丈 夫

連續八年目の正月——大阪に於ける新春公演は今年で實に八年續いてゐる。

想ひ起こせば、一代の巨星、盟主澤田座長介、西せむか東せむか、その行くべき道に光を失はむとしたわれは、結東斷乎、その更生の第一歩を浪花座に踏み出し、轉じて角座に、更に中座に、歌舞伎座に陣を進め故座長の唱へた『半歩主義』に則り、われは正實に、演劇の本道を歩、一步否文字通り半歩宛の前進を續けた。

而して一昨年創立二十周年記念公演を催し得たわれは、こゝにまた歡喜の渦中に戰捷の新春を迎へて、慶びを大方諸賢と共にする幸に浸り得るの光榮を感じるものである。

東亞の一角に巍然とその頭角を聳えしめ、世界に向つて儼然と大和民族の存在を認識せしむる一つの段階であるに過ぎな

い、今回の事變の終結を以て「戦は了れり矣」と斷ずる事は餘りにも早計であらねばならない。「戦はまさにこれから」なのである。

二十周年記念公演を劃して、われは亦「藝術的大衆劇の樹立」「演劇報國」の大旗を翳して、新らしき戦に臨まねばならない。

◆ 今回の新春公演は、關口次郎氏が十年の沈黙を破つて筆を執つた『われ等失ふとも』と、現文壇に於ける異才、小島政二郎氏の「清水次郎長」の二本であるが、前者は、時局を背後より洞察して所謂キワモノに墮せず、眞の意味での時局劇として、また文藝的大衆劇として特異の存在價値を問ふもの、また後者は、稗史に最も興趣深き任侠の一たる清水次郎長を拉し來つて作者独自の解剖と肉附けを施したものと、敢へて自負した

いものである。

皇紀二千五百九十八年、新國劇搖籃の地たる浪華の初春公演として、冀はくは、より輝かしき、より大いなる進展を示さ



新春 希望 中山楠雄

新年の御慶芽出度く申し納めます。

扱ていよ、昭和十三年の新春である。

思へば昨年(こゝろ)の劇壇程(ほど)、さまざま(さまざま)な事のあつた年も少い(すくない)。

勿論、事變(じへん)が及ぼしたそれらの影響(えいぎょう)が、後半期(こうはんき)の劇壇(げきだん)を席捲(せきけん)した事は事實(じじつ)だが、それ以上(こゝろ)に前半期(ぜんはんき)には既(すで)にない、只ならぬ動き(うごき)のあつた事は見逃(みのが)せぬ事實(じじつ)である。

それはなにかせねばならぬといふ動かし難い(むづかしい)氣配(きはい)が、各劇團(げきだん)に現れた(あらは)れた事(こと)であつて、例へば歌舞伎(かぶき)劇壇(げきだん)に於ける問題(もんだい)の左團次(さだんじ)の自由劇場(じゆうげきだん)再建(さいけん)である。これは事變(じへん)の爲(ため)また、その期(き)を失つて(しな)はしまつたものゝ、これは左團次(さだんじ)が染髮(せんぱつ)の仕事(しごと)であり、

せて頂きたい。こゝに渝らぬ御聲援(ごせいえん)を希望(きぼう)ふと共に、遠く皇軍(こくぐん)將士(しょうし)の勞苦(らうく)を偲(しの)びつゝ、大方(おほま)諸賢(しよけん)の御健康(ごけんかう)を切(き)に祈(いの)つてやまな次第(しだい)である。

こゝにも歌舞伎俳優(かぶきはいゆう)のなにかしなくてはならぬといふ大きな動搖(どうごう)が起(お)されてゐたのである。

新派劇團(しんぱげきだん)では先づ(まづ)井上正夫(いの上 せいと)の活躍(かつやく)である。「北東(ほくとう)の風(かぜ)」「地熱(ぢねつ)」「湖心莊(こしんじょう)」「華やかな夜景(けいげい)」などの中間演劇(ちゅうかんげんげき)の所産(しよさん)は、立派(りっぺい)に昭和十二年(しやうわ じふにねん)度(ど)劇壇(げきだん)の美事(びじ)な功績(こうせき)たり得た(え)のであつた。

本流(ほんりゅう)新派(しんぱ)ではたゞなにかしなくてはならないといふ苦難(くるなん)の道(みち)を通(と)つて來(き)たゞけで、寧ろ(むしろ)仕事(しごと)らしい仕事(しごと)はなかつたといつても仕方(しかた)あるまい。

「殘菊物語(ざんきくものがたり)」程度(ていど)が偶々(たまたま)好評(こうぱう)を受けた(うけた)のでは情けないといふ他(ほか)はあるまい。

「狐舎」や「雪國」では、本流新派の無理な仕事といはなくてはならず、ではどういふ脚本を、といふところに本流新派の機みがあるわけであらう。

前進座が大阪で成功した大衆興行が、東京で失敗に終わった事も、よき今後への暗示となつたし、東宝劇團の見る影もなき散々の體は、かうした時局には無力なものゝ、はつきりした敗北を示した事になるし、新國劇の活躍は、如何に若々しく勇氣を以て闘つてきたかといふ、永い間の苦勞の報ひといふの他はあるまい。

新劇が商業劇場で二三成功を見たといふ事だけで、早くも喜ぶのも早計であらう。新劇が自分達の爲に作つた機構の設備ある舞臺の外に、商業劇場の不自由なだゝツ廣い舞臺で、自分達の從來のレパートリーを演じるといふ事、それ自體が既に新劇の喜ぶべき現象とはいへないではないか。

文樂座の後半期事變後もまことに氣の毒である。本城の文樂座をニュース劇場に占據されて、僅に一二回他の演舞場程度でほそ／＼にかいひわけ的に公演してゐる事も實に情けない。

かういふ時局の時にこそ、文樂座が大いに奮闘して立つべきではないか。

僅に文五郎、紋十郎級の人形が藝妓衆の温修會の舞臺に他流

の淨瑠璃で踊つて、もしも彼等がよしとするならば全くもうなにをかいはんやである。

昭和十三年はもう一つ力強く演劇の爲に、凡ゆる劇團は總動員で立ち上らなくてはなるまい。

演劇報國精神總動員！

それにはもう一つ、無駄なものを廢したい。下らぬ朝幕や、追ひ出しを止めよう。幸か不幸か、上演時間の制限も出来るやうであるから、さうした無駄はどし／＼止めなければならぬのだ。

大阪の劇壇の事にすれば、つまらぬ役者なだめの愚劇——從來常にあつたそれら——を快く皆で止めるやうに務める事だ。

文樂座にしてみれば同様で、若手級の切符の賣れる太夫の爲に愚劣な出し物をさせぬ事である。そして人形の配役にしても實力の無い藝の解らぬ人形遣ひはどし／＼端役に持つていつて同じ若手でも、有爲な人達によき配役をさせるべきである。

昭和十三年の劇壇は必ず輝やかしい仕事を、それ／＼に澤山持つ事であらう。



芝居素描

6 篇

大友柳太郎

舞臺

何と云ふ大きな
そして絢爛華美な
矛盾でせう

緞帳

この厚ぼつたい
原始林の奥に
さまざまな
色彩と體臭とを持つた
動物が
異聲をはり上げて
地ばたきをしてゐます

花道

光りです
磨かれた貴婦人の背中
です

幕

若く美しいお嬢様方
ベッドのシートにいか
がです
御最負役者の體臭が
ほのかに漂つて來るで
せう

奈落

やれやれ
どうやら今日も一日
うまく胡麻化しおほせ
たわい
——アポロの神の獨り
言です

樂屋

お伽の國の王子さま
遠い昔のお姫さま
みんなで夢をみてゐま
す



とらの
の
氣
焰

市川 小 太 夫

私^{わたし}が寅^{とら}歳^{とし}のお生^{うま}れ^だから何^{なに}か……で
す。處^{ところ}がね、寅^{とら}だか丑^{うし}だか氣^き持^{もち}の上^{うへ}
でどうもハツキリしないものがあるの
でして、それはね、餘^よ程^{ほど}前^{まえ}の事^{こと}なん
ですが、ある街^{まち}を歩^{ある}いて居^かるとプツッ
と下^{ひた}駄^だの鼻^{はな}緒^ぢを切^きらしたとおぼしめ

せ。大^{おほ}いに困^{こま}つてふと見^みると、看^{かん}板^{ばん}に
曰^いく。「運^{うん}命^{めい}判^{はん}斷^{だん}、説^{せつ}明^{めい}無^む要^{よう}、其^{その}處^{ところ}へ
座^まればピタリと當^あてる」と頗^さる自^じ信^{しん}の
ある能^{のう}書^がな^かのです。何^{なん}となく、實^{じつ}に只^{ただ}
何^{なん}となく此^{この}處^{ところ}の家^{いえ}へフヲフヲと這^{はい}入^いつ
たものです。黒^{くろ}光^{ひかり}りの大^{おほ}机^きを前^{まえ}に頑^{がん}張^{ばう}

寅^{とら}年^{ねん}の辯^{べん}

初^{はつ}瀨^せ乙^{おつ}羽^は

阪^{さか}の歌^{うた}舞^ま伎^ぎ座^ざの舞^ま臺^{たい}で元^{もと}旦^{たん}を迎^{むか}へます
譬^{たとへ}に虎^こは千^ち里^りを往^ゆくと云^いひます。十
三^{じゅう}年^{ねん}の寅^{とら}年^{ねん}こそは卦^けの表^へは幸^{さい}先^{せん}宜^いしで

お恥^{はづか}しい話^{はなし}で
すが丑^こ年^{ねん}は何^{なに}事^{こと}
も無^む意^い味^みに暮^く
して來^きて了^{しま}つた様^{よう}
です。洵^{まこと}に牛^{うし}の
歩^あみ^みに似^にて遅^{おそ}
たるものでし
た。然^{しか}し直^ちき^きに
干^{かん}支^しの寅^{とら}年^{ねん}を迎^{むか}
へます。
寅^{とら}年^{ねん}に北^{ほく}海^{かい}道^{だう}
で生^うれ^て、二^に度^ど
目^めを東^{とう}京^{きやう}で、小^{せう}
學^{がく}校^{こう}を卒^{そつ}業^{ぎやう}した
年^{ねん}です。三^{さん}度^ど目^め
を「寶^{たから}塚^{づか}」で迎^{むか}
へ、四^よ度^ど目^めを大^{だい}

つてゐらしつたのは、顔も長いが髭も長い、眼もギョロギョロと大きい、丸打ちの羽織の紐が鼠色ながら又ヒドクでつかいと云ふ堂々たる大先生で。

「ハ、ア、明治三十五年一月廿六日生れか、フムフム、三十五年は寅歳だね。だが寅は廿六日間しかない。寅歳の生れでも舊曆で観ると丑の一つばいだ。だから丑歳で観る。エヘン、丑歳は辛棒強く根氣良く……」とまあ、この事件に遭遇して以来、寅歳の生れだが丑歳の一つばいで、然し生れたのは確に寅の年だ。と云ふ蜘蛛の巣に引つ掛かつた様な、解つた様で解らない妙な觀念にトラワレてしまつたのです。然し二五九八年の氣焔を擧げると云はれれば、丑の氣焔より寅の氣焔の方がピツタリするようですから、寅歳の私に二五九八の炎々たる氣焔を吐く事にして……

がさてこの氣焔ですがね。となると云ひたい事は山程あるが、昔々の日本一の富士の山が、活火山で、シキリニ火煙を天に向つて噴上げてゐた頃の様な勢ひで、最限も無くやり出したら恐らく締りがつかない結果に陥つてしまひそうで頗る危険ですからね。常套手



す。この虎の様に「藝術」と云ふ難しい曲者に眞正面から武者振りついて、よき事を、よき歳のために働いてみたいと存じて居ります。人は死して名、虎は死して皮、を残します。醉生夢死の輩は何を残しませう——。(丑年暮記)

段の齒に絹を着せてヤンワリと、一束ねに云つちまうと、ます二五九七年の歌舞伎の動靜を顧れば、居候が公園を散歩してゐる様に何となくブラブラとした感じで、赫然たる收穫に乏しいと云ふ趣きが濃厚ではないでしようかな。まして物情騒然未曾有の大事變の幕が切つて落されて、切々迫々たる眞劇が急テンポに進展してゐる渦中に在つて、歌舞伎たるや實に泰然と、卒頭の閑、又樂しからずやと、百癸の欠伸を天下大衆に求めた以外何物も無してはなかつたですか。斯くの如き場合こそ、世情のテンポに比例した、斬新な構成に基いた興行手段が必要であり又しかしてこそ國を擧げての隔世の大事業、國劇に及ぶの意義、湧然として燦たり、ではないですか。

二五九八年。内外多事、非常展開の方向豫斷致し難し。今年こそ——。今



蔣介石逃げて？

丸 茂 三 郎

子供の頃、頭をトラに刈られてク虎狩りだアとあばれ廻つた記憶はなつかしい。

清正と虎は有名で、清正の幼名がまた虎之助たるも面白いが、さて朝鮮に於て虎を退治するのに大して苦勞をせなかつた清正もあとで家來共に慰留の意味の一つばいを飲ませたら、久々の酒とて皆トラになり、清正もこんなつもりぢやなかつたかと目をチクリのロアングリ「トラどうぢや」はよくないオチだ。

芝居で拾つたトラバナシだが、何時か歌舞伎座で軍事劇の出た時、手が足りなくてエキストラが澤山出た。然しこのトラは日本軍の兵にはオーライとばかりだが、支那兵にはなり手がなくて……。

これはトラの名優の話——長谷川伸先生の作で江戸の虎退治といふのがある。江戸に小心者の魚屋あり、大名屋敷に献上の虎が檻を破つて逃げ、この魚屋の表に現れるところを、この魚屋が小心の餘り我れを忘れて虎にとびかかり、〇〇をニギツて勝つといふ目出

虎物語

河原崎長十郎

年こそ國劇歌舞伎を總括する中央の發令よろしきを得て、從來陥る處のブラブラ性を然るべく精算して新鮮な息吹きを求むるや切なり。將に三十七才の春を迎へて幸に身體壯健、腕を撫して待つ、でありますぞ。二五九八年の氣焔。 鎌倉偶居にて 市川小太夫

僕と虎とは大分縁があるです
第一生れた時が寅年で、但し寅日、寅の刻ではありませぬ、生き膽をねらはれると大へんですから、それは一寸さけて顔を出しました。

度し／＼の筋……。さてこの虎の役だが、仲々の大役で、人間離れのしたのを探したが、仲々見つからず、虎サガシにいと苦勞。やつと或る劇團の専門家（獸ばかりやつてゐたといふ人）を見つけ出して來てもらひ、僕も稽古の日見學したが、實にウマかつた。魚屋を追つて屋根から屋根、地上へ、右へ

父は男の子が（つまり僕の兄達が）育たなかつたので今度のこの子は育てたいと考へたのださうです。所で何と云ふ名前にしたらよからうと首をひねると、そばに居た伯母が（伯母は武田屋と云ふ芝居茶屋の女主人でこれ又おとらさんと云ふ當時の名物女でした）「まあ丈夫になるやうに、清正公さまの向ふを張つて虎之助とでも、おつけな……」と冗談を云つたのださうです。

左へ歩く形のよき——動物園の總見があつても恥かしくあるまいと思ひました。

虎は死んで皮残す、蔣介石逃げて恥残す、僕はこんなものを書いて——オヤオヤ蔣介石と同じものを残すのかなア……。

所が眞面目な父は「そりやあいゝ！」と手を打つて喜んで、スグ決つたのださうです。子供の「虎ちゃん」は長十郎と名をつけて舞臺へ出るやうになつたが、長十郎さん等と呼ぶ人はほとんどなく「虎ちゃん」で通つてゐたのです。十七の春から、左團次さんの一座に御やつかいになり、大人になる時分、この「虎ちゃん」は名の如く「とら」になり

出しました。

虎ちやんは呑むと虎が荒れ出したやうに、深夜まで通りのごみためをひつくり返して歩きまはつたものです。その時分の相棒は村山知義君や伊藤薫朝君でした。

僕は畫の大家です。生き〜とした墨繪の虎が千里を走るのを書きます。

所が、或るファンが「これは百足かい」と質問したのです。

これは心外の至りで、猛虎が今や風をきつて走りつゝあると自負する繪をみて百足とは何事である!

所で次から書く時は、虎の上に

「是は虎なり」とか「猛虎大舉行進の畫也」とか竹籤などを書いておきました。

所が「どうもロイドメガネをかけた

やうだ」とか、色々批評がまち〜なので、結局大衆性なきものとして、

「この虎が千里を歩むこん氣哉」と、書きつけるやうにしてみました。

「夜になれば、牛になつたり虎になつたり」と云ふ句でお盆の前で牛がよだれをたらしとらが目じりをさげてゐる

畫もいくつか書きました。定めしこの牛も様々な觀察が行はれたことでせう

所が前進座になつてからは、所謂とらにはなれなくなりまして。

元來呑めば呑めるし、呑まなくても少しも苦しみを感ぜない調法な種類でいそがしいのにお酒を呑んで二日酔なぞやる氣になれません。

最近ではちつとも呑まないしらふの虎です。

このへんで虎物語りをおへまして、あとはお芝居を御らん下さい。

虎は手がけられぬ



畑中夢坡

私は日本人の中では、世界を広く歩いたと云ふ點では、普通以上だと思つて居ます、内地は元より、朝鮮、支那、北米合衆國では、太平洋沿岸から大西洋沿岸まで、足跡を印せざるなしで、従つて諸外國の自然にも人事にも可なり洪範に亘つて交渉を持ちました、が、只虎と云ふ動物に對してのみは縁が薄く、動物園の檻を隔て、時々相見するばかりで、残念ながら嘶の材料がありません、虎の代りに猫か犬にでもしていたらけると、隨分種も多いが虎では……。

幕間隨筆

森 律 子



自分の生れた年だからといつて自慢する譯ではありませんが實際寅年は多少の單純さはあるかも知れませんが如何にも元氣がよくつてよい年だと存じます私も大いに此勢ひをかりて今年は無臺に活躍したいと祈つて居ります。「人は死して名を残し虎は死して皮残す」といふ古い諺も御座います。曾て新派に

居られた故藤井六輔さんを思ひ出します。無臺で虎の役に扮して非凡な妙技は全く後世に迄其名をうたはれて居られます。私も虎に扮さない迄も名を残す丈けのものを演じたいと祈つて止みません。

これは又別のお話ですが、此頃のように毛皮が大流行致して居りますが、どうも毛皮の中でも虎とか豹は外人の外装にしてさへも其色どりや毛の質が多少強過ぎる感じがある様に思はれます。そこへ参りますと却つて始終虎の威をかりて居るといふ狐の毛皮の方が一般婦人に相應しく思ふのもおかしなもので御座います。



虎と酒と娘と

秋月正夫

又特に寅年の和服の好みと致しても虎の形其儘を用ひずに和藤内とか吃又に因んだ模様で寅をきかすとか、虎を彫つた帶留の金具に竹の模様の帯を締めるのも又一寸面白いと存じます。此頃は多少ハイカラな色どりの好みから、黒と黄の配色が用ゐられて居りますがこれも又上手に和服に用ひて虎をきかせると存じます。以上横道にお話がそれましたが兎に角吃又の一念にも負けない積りの私の藝術に對するこの一心が石をも通さずには置かない覺悟で愈々新しい寅年に向つてスタートを切ります。

言 駢 家 酒 飲

生 雄 志 興

は泣トラ、笑酒は笑トラなんて區別するが好いのではなからうか、私なんかあまり飲める方でもないがどちらかといえは賑やかな方である、それ丈に友達と飲み歩いて相當朗らかに酔つてゐるのに「おい昨夜君はすっかりトラになつていたぞ」なんて云われるに於ては、どういふところからトラなんて俗稱

大酒飲みを大トラと云ひ飲み過ぎたことをトラになつたと云ふ、

酒亂の人が度を過せば虎の如くに亂暴を働くから結局大トラなんて人は云ふのであらうが、それなれば泣酒

B ク虎の畫家として有名な君に、干支に因んだ虎の漫談を聞かして貰いたいんだがね、戰勝氣分に虎の正月つてのは、一寸いゝからね、つまり虎は朝鮮から日本へ渡つてウンと榮養をとつて猛虎遂ひに四百餘州の龍をやつつけたんだ！

A クそれでいゝぢやないか、立派な漫談だ。第一僕には戰勝氣分の虎の漫談なんて、そんなお謙向きなのないよ

B クまあ、そう言はずにさ、ホラ、僕がいつか一度君を訪ねたことのある山の手の家な、あすこの親父は大變な虎マニアだつたぢやないか

A ク仕方がない、話すよ。——あれはね、僕がやつと學校を出たばかりの時さ。モデルを雇ふにも金はなし、毎日動物園へ行つては、狐や狸ばかり描いてゐたが、ある時、虎を描く氣に

なつて、毎日あの鐵柵の前へ三脚を据るへ日が續いたんだ。すると僕の手元を熱心にのぞき込む男があるんだ、それが毎日なんだよ。そのうちポツリ／＼話しかけて來るんだな。虎の目はこう描く可きだとか、虎の習性はこうだとか——初めはク何んだ、こいつ／＼と思つてゐたが、事實、虎に對する造詣といふか、まア研究が深いんだね。で、その畫の仕上る頃には、スツカリ仲よしになつて了つたんだ。或る日ゼヒ來いと無理にその家へ連れてゆかれたい。みると愕いたね、玄關から家の中至る處に虎が居るんだ。つまり彫刻美術の悉くが虎、虎、虎だ。立派な飾棚が幾つもあつて、それにギツシリ世界各國の美術玩具、それもまた、虎虎虎の一點張りだ。親父は宇頂天になつてその一々の自慢やら説明やらするんだが、僕はあまり興味も湧かすいゝかげ

が出てきたのか私にはその意味が判らなくなる、まして『おい俺は好い氣持ちでトラになつたよ』なんて人に聞かされようものなら益々その意味が解せない、どう見ても虎は朗らかな動物とは見えないのだから……

今年(こゝと)は虎年(こゝとね)丈(だけ)にこの俗稱(ぞくじょう)には？を一入(い)感(かん)ぜざるを得(え)ない、

或(ある)る雑誌(ざっし)の座談會(ざだんかい)の中に『女優(じゆうゆう)の某(ある)と、某(ある)は大トラ(おほトラ)だよ』なんて書いてあるところを見ると要(い)するにトラと云ふ俗稱(ぞくじょう)は、悪い意味(い)で呼(よ)ぶ時に使(つか)ふ言葉(ことば)であつて、一般(いぱん)の酒飲家(しゅきんか)にはあまり適要(てきよう)しない言葉(ことば)ではないの(か)知ら。

んに聞いてゐたよ。で、もう歸(かへ)らふとするとクまア折角(せつかく)來(き)て呉(く)んだんだから、晚(ばん)めしを喰(く)つて行(い)つて呉(く)れといつてゐるうちに、娘(むすめ)らしいのが、膳(ぜん)を運(は)ぶんだ。その娘(むすめ)がね、便所(べんじょ)の歸(かへ)りの僕(わが)を呼

び止(と)めてク申譯(まを)けないが、どうぞ父(ちち)と御飯(ごはん)を一緒(いっしょ)にして歸(かへ)つて下さい、さもないと、また後の不氣嫌(ふきげん)が心配(しんぱい)ですから……初對面(しょたいめん)の若い男(おとこ)に泪(なみだ)をうるませて頼(たの)むんだね。それでも歸(かへ)ると言(い)ひ張(は)るほどの超人(ていじん)でもなしクまゝよくと勇猛心(ゆうめいしん)(?)を奮(おこ)ひ起(おこ)して、御馳走(ごちそう)になり、親父(おや)に喜(よろこ)ばれの、娘(むすめ)に感謝(かんしゃ)されの、でその晚(ばん)は歸(かへ)つたんだ。

それからといふもの、三日(さんじつ)にあげず呼(よ)びに來(き)る。そのうちに解(わか)つたことはこの親父(おや)昔(むかし)は相當(おな)いろくやつたらしいんだが、そのすべてに失敗(しつぱい)して、今(いま)では、虎(こ)のコレクションに殘(のこ)りの人生(じんせい)の一端(たんたん)をつなぎとめてゐる、といつた風(ふう)な、もう六十(むそ)を過ぎて女房(にようばう)は早くに亡(な)くし、娘(むすめ)と二人(ふたり)だけで不思議(ふしぎ)な暮(く)しをしてゐる。娘(むすめ)だつて、もう嫁(よめ)にやるか、婿(むこ)をとるか(の)年頃(としごろ)だが——その娘(むすめ)がまた君(きみ)も知(し)つての通(と)り、一寸(いちずん)飾(かざ)らし

たら、入江(いづみ)たか子(こ)と、原節子(はらふし)をチャンボンにした位(くらい)にはなれるんだが、ただ、てゝ親(おや)のためのまるで父(ちち)の世話(せわ)女房(にようばう)の氣持(きもち)ちでゐるもんだから、どうにもバツとしないんだな。

で、話は先(ま)へ進む(すす)むが、その歳(とし)の暮(く)れ近いある夕方(ゆふがた)、親父(おや)がシヨンボリして僕(わが)の下宿(げしゆく)へ現(ま)はれたんだ、ク今(いま)、牛込(うしご)の骨董屋(こつどうや)で素晴らしい出物(でぶつ)を見付(みつけ)けたんだが、どうにも今(いま)すぐそれを買(か)ふことが出來(で)ない、今(いま)にも誰(たれ)かに買(か)はれやしないかと思(おも)ふと心配(しんぱい)で堪(た)まない、とても落着(おち)いてゐられないと言(い)ふんだ、ク何(なん)です品物(しなもの)はクと訊(き)くと、親父(おや)、長太息(ながそいき)してク虎(こ)の皮(かわ)ですよ。無論(むろん)、僕(わが)は呆(おろ)されて、その時(とき)はだまつてゐた。

二三日(にさんじつ)たつてから、暫(しば)く振(ふ)りて賣(ばい)れた畫(え)の金(かね)が入(はい)つた。永(なが)いこと渴(か)いてゐた懷中(ふところ)が暫(しば)くぶりに暖(あたた)くなつて、先(ま)づ



當(あた)りど(ど)し(し)の(の)み(み)た(た)り(り)の(の)や(や)く(く)し(し)や(や)

當(あた)りど(ど)し(し)の(の)み(み)た(た)り(り)の(の)や(や)く(く)し(し)や(や)

當(あた)りど(ど)し(し)の(の)み(み)た(た)り(り)の(の)や(や)く(く)し(し)や(や)

菱(やま)田(た)正(ただ)男(おとこ)

編輯部の源多氏から「寅年に因み、扇雀、小太夫、長十郎をまとめて一つとしてお話し下さい」との依頼があつた。

(寫眞は扇雀丈)



これで見ると、扇雀、小太夫、長十郎三君とも昭和十三年は當り歳と見える、昔からク役者に年齢はないもの、聞かぬもの、言はぬものといふ鐵則？がある

「失禮ながら、貴優はことしお幾つで

……」など聞こうものなら「年のこ

とは聞いてほしくありまへん」とやられる、だからこちらが最初に「失禮乍ら」とわざ／＼お断わり申上げても、ク失禮でせう々と来る、こうなるとどうせ念入りに断られるのなら、ク失禮ながらと申上げなくとも「怒るだらうが、時にいくつになつたんだい」と云つた方が比較して

餘計なことを聞かずに済むテナわけで、その失禮なことをコツソリではなく、堂々放送する源多編輯子、なか／＼ト一チカ心臓と見える。

×

サテ名づけて「當(あた)りど(ど)し(し)の(の)み(み)た(た)り(り)の(の)や(や)く(く)し(し)や(や)」といふ三虎傳も實は編輯子が名づけ親だが、エノケン張りの醉虎傳とはちがふらしい、他の寅年の役者衆はちよつと控へていたゞいて、この三虎傳について何か書くことにする、「トラひどい」と苦情が出るかも知れぬが、もうこう(猛虎)なつたら觀念せい……だ



× (寫眞は小太夫)

親を亡くした京の虎、中ぼんこと扇雀
ハン、むかしからよく言ふ通り『若い者は親が死んでからはじめてわが身を知り、努力するやうになる』とあるが、扇雀クンにもこの言葉がピッタリ當て嵌まる、悪口ではないが、『親の光りは七光り』時代がこの人にもたしかにあつた、鴈治郎存命中の扇雀と、鷹じき今日の扇雀とは

て日一日と、大成へ近づいてゆく扇雀の姿はやがて、千里を走らうとする虎の構へに、鬚髯たるものがある、當り年を迎へて更に、頑張つてほしい、京都に住んでゐるだけに誰よりもよく顔を合はせるし、面と向つて相當イヤなことを言つて來た筆者は、これからも、やはり赤面役でゆくつもり、切に自重を頼みまつせ、

奮闘ぶりがテンデ違ふ筆者の癖目かも知れぬが同じ一生懸命にしても氣の入れ方が違つてゐる元來が器用な優だけに將來まだ、伸びやうし鴈治郎の死によつて埋れてしまふ惜しい、上方狂言をよく演じ、活かせて、天晴れ大成駒家の後継者として耻かしくない俳優とならねばならないだけ、考がへやうによつては、鴈治郎の死はこの人に對して、いゝ時機であり、無形の大きい鞭だと思ふ、その鞭に毎日打たれ、く

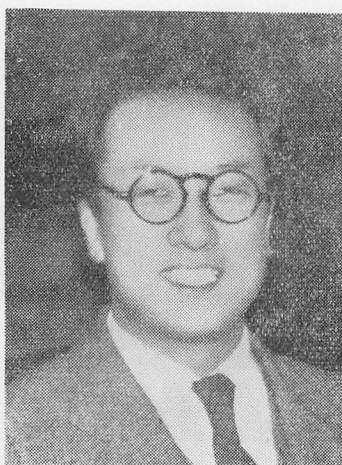
× 猿之助、壽猿、八百藏、小太夫、段四郎と、いゝ兄弟親子揃つた澤瀉家はほゝえましい存在だ、不幸にして先年壽猿君は歿したが、猿之助、段四郎親子の相似面が盛んに舞臺狭しと暴れてゐる一方、八百藏、小太夫兩君の精進も見のがせない、就中小太夫は、兄達と離れて最近はスツカリ上方役者になつてしまつたが、猿之助とどつこいゝの力演で觀客を唸らせてゐる。ク好漢愛すべし々の評判に筆者も蔭乍ら喜こんでゐる、曾てク新興座々の盟主として關西劇界に萬丈の氣を吐き、扇雀との合同劇に於てもなかゝいゝ味を見せてくれた。時代に、世話に舞踊に器用なところを發揮し、樂屋で合つても、面白く、話もなかゝ巧い、『すつかり大阪に尻を落つけるつもりか』といつか筆者が問ふた時『東京へ歸して

くれねへらしい、仕様がねえからこちらで家を持ちました、これで落ちついて演れますよ」と笑つたが、ほんとうに上方に落ちついてしまつた、關西歌舞伎に無くてならない存在となつたことはこの人のため、關西劇壇のために大いに喜びたい、そして生れ歳の虎そのまゝの猛演をまたくり返して見せてくれるであらうことを期待してゐる。

×

サテどんじりに控へし虎は、わがなつ

(寫眞は長十郎丈)



かききトラちやんで、姓は河原崎、名は長十郎、前進座の御大将で、會社の社長四面八臂の勇を揮ふ猛虎そのもの、だがこれはヒイキの引き倒し言葉で、實は温順しい好青年(このところべんちやら御無用)と見受ける、舞臺で聲を張り上げ「暫」に「助六」に「辨慶」に奮戦力闘よろしくあつても、樂屋で會へば全く人のいゝ役者らしくもない青年紳士である。

話せば、劇であれ、映畫であれ、なかなか相當なもの、そして人の話はどうな愚問にも叮嚀に答へ、迷談にも熱心に耳を傾ける、聞き上手、話し巧者がトラちやんである、「前進座の長十郎といふ役者は、もつと歌舞伎役者らしい話せない人かと思つたら、案外も案外全くいゝ感じのする人で驚ろいた」と筆者の友人がトラちやんと初對面のあと語つて眼を剝いてゐた、これで餘計

なことを書かずとも判つてもらへやう、松竹に謂はゞ叛旗を翻へして「前進座」を組織し、鬻石衛門、國太郎、鶴藏らのよき盟友と手を組んで不撓不屈、文字通り荆棘の道を踏んで、今日の成功を見たこの喜びは全くトラちやんら一黨の喜びばかりではなく、劇界の驚異であるその上全座員の共同生活といふ未曾有の計畫を遂行してアツと言はせた、まことに恐るべき優である、つねに新國劇と並び稱され、成功を謳へられる長十郎クンも、いつ迄もこの調子ぢやいけない、十三年には層一層の頭張りズムを發揮してほしいものだ、三虎傳いづれ劣らぬ若武者ぞろひ、將來へ多大の期待をかけて筆を擱く。

(十二、十二、廿二)

(御奮闘を編輯子もお祈りいたしてをります)



虎の出る芝居

森 ぼのぼ

「吃又」で修理之介が虎といふ獸が日本に出た例がないと言つてゐるやうに、何しろ日本に棲んでゐないのだから、従つて芝居へ現れることの甚だ勤いのも無理はない。それに筆者が不勉強と來てゐるから、なほ識所は勤い。それは前以て御許しを願つておく。

血描きの虎

先づ前に述べた「吃又」に虎が現はれるのは、芝居好きの方なら既に御承知の

こととせう。あの籤疊へ現はれる虎は、芝居では平凡な普通の縫ぐるみですが、本文へ傾城反魂香に據ると、若い美しい繪師狩野四郎二郎元信が、左京ノ太夫頼賢卿の江州高鳥の館で、家老やお抱へ繪師の悪人輩に追ッ取り圍まれ、身が危くなるので、我と我が肩を喰ひ破り、その血を含んで襖戸に直傳の猛虎を描くと、筆勢に精魂が入つて敵方を散々に痛めつけ、元信の縛の繩を嚙切り、元信を背に乗せて首尾よく危難から逃れるといふ

大活劇を演じ、果は山科の藪蔭へも姿を現じるのです。かういふ譯で、本當は血描きの虎を暗示する縫ぐるみを誂へなくてはいけないのであります。無論、この場は芝居でも人形でも演つたこととはないうやうに思ひます。

千里の籤の虎

「國性爺合戦」の千里の籤の場に出る猛虎は立派な縫ぐるみで、和藤内と大格闘をしますが、母が肌の守りとしてゐる

大神宮の御祓を差向けると、神の威徳に依つて虎は俄に勢ひ挫けてしまひます。さうして虎狩りに来た韃靼兵を家來として従へ、母を虎の背に乗せ、和藤内はその口を取て意氣揚々と引上げます。人形でも出ることはあるやうですが、芝居ではたしか三升が荒事風に演つたことがありますし、伊井蓉峰も近松研究として演りました。長唄にもこの「虎狩」があります、とぼけた味の面白いです。

水滸傳の虎

水滸傳中の武松の虎退治は有名なものですが、この武松を頂戴してその名も大原ノ武松といふのが、蒲ノ冠者が追出した虎を打殺す芝居が昔あつたさうで、大芝蕪がこの役をして當てたといふことです。岡本綺堂先生の「水滸傳」には梁山泊での人氣者、黒旗風李逵が母親を喰ひ殺した虎を殴り殺したり、斬り殺したりする件があります。三幕目の第二場で、猿

之助がこの李逵に扮し、四匹の虎との組討ちが當時大評判になつたもので、此幕の立見(一幕見)は物凄入でした。それは昭和三年正月の本郷座です。

清正虎狩

加藤清正虎退治は、誰しも幼い時分からお馴染の話ですが、和藤内や水滸傳の勇士達のやうに劇化されてゐません。たゞ昔の所作事で十二支の踊の寅に當る分がこれで、地は竹本、役者は踊の名手、永木三津五郎であつたさうで、竹本地だけに、踊といつても寧ろ荒事に近いものであつたらうとのことです。

新國劇の虎

新國劇の島田が演つた物で、見世物の虎が飛出して街の人を驚かせる狂言があります。たしか長谷川伸氏の作と思ひます。筋は忘れましたが、落語風の軽い味のもので、島田の魚屋が暴れる虎と組討

ちをやり、虎の急所を緊め上げて殺してしまふ處が笑はせました。

六輔の虎

これも狂言の名は忘れましたが、新派の芝居で、虎を飼ひ馴らしてゐる妖艶な貴夫人が河合武雄で何かの拍子で指に僅かの疵がつく。その血潮を虎が不圖嘗めると、急に猛獸の素質を取戻し、最早主人の見界も無くなつて、遂にその美しい夫人を喰ひ殺して了ふ條があつて、やはり此處がヤマでした。その虎を大の愛嬌者で、伊井蓉峰の番頭役者と呼ばれた藤井六輔が演りました。尤も藤井はこれよりも大分前に、伊井が例の近松研究を中洲の眞砂座でやつてゐた頃、「國性爺合戦」の千里の籤へ出る虎をして頗る好評であつたので、無論この夫人を喰ひ殺す虎も好評でした。それもその筈で、熱心な彼は上野の動物園へ日参して、虎の動作を研究し、スツカリ會得したのでした。

敏夫ちやん

食 満 南 北



皆さんは林敏夫ちやんを識つてゐらつしやいますか。長二郎君と一緒に映畫にあらはれる敏夫ちやんはよう御存知でせう。それから舞臺へ立つた敏夫ちや

んも識つてゐられるでせう。しかしそんな敏夫ちやんを私は新年早目々あらためて云ひたうのではないのです、ペンをはなして、敏夫ちやんを御紹介したいと思ふのです(生) 舊冬澤山な原稿をもつて敏夫ちやんが私の宅へ來られたのです、

「どこぞこれを本としてくりやはらしまへんやらか」

私はその原稿を讀んでびっくりしたので、

「第一の失戀」

「第二の失戀」

など實際にくまらずしてうまく描かれてゐるのです。私は私の手近に出版を業とする人が殆どないと云ふて

よい位でどなたにも相談が出来なかつたので、近處ではあり時々來られる、上方趣味の渡邊紫樂君に御相談したので、

「サア私のところの本と趣味があひまつしやる」と云ひながら敏夫ちやんの原稿をもつてかへられたのです。さうして幾月かたつたけふ、

林敏夫の日記

といふイキな本が出版されたのです。

敏夫ちやんが丁度舞臺にかへり咲かれる時、表紙の梅の花が咲いたやうにこの小冊子が生れたのです。

しかもそれ以來敏夫ちやんはセツセつとかいた隨筆

をものされてあちこちの雑誌へ寄贈してゐられます。最近にもう一冊出さうといふ計畫もすゝめてゐます。

可愛らしい敏夫ちやんが可愛らしいことを描いてある可愛らしい小冊子をどうぞ讀んであげて下さい。

さうして『道頓堀』も亦こんな文士が手近にある事を知られたら、尠し紙面をこの可愛らしい文士にあたへてあげて下さい。

寫眞はいつも本誌に御執筆下さつてゐる食満南北先生で、修正なしのスイツナブです。

故郷と國境

—當る寅歲初春漫才—

松竹亭 ウメマル
笑亭 ニココ

- △——まことにお目出度いお正月で
- 全く戦勝の初春ですな
- △——南支北支の經濟工作も着々すゝみ
- あなたの晦日の借金拂ひもすみ
- △——無茶言ひよる……
- 何んにしてもお天氣はよし、ごうです
- △——澤山の入出は
- △——道頓堀から千日前へかけて、マルで小
- 半洗ふやうですワ
- お正月といふと先づ芝居ですな
- △——殊に中座の大歌舞伎
- 續いて歌舞伎座の新國劇
- △——島田、辰己の名コンパ
- それも言ふなら名コンピ

- △——角座は又、關西新派の梅野井が新藝者
- 漫才讀本をなんでやらんのやらう
- そんな事阿呆らしてやるか
- ソレニごうです、ニュース館から轉向
- △——した浪花座が大船の實演で
- △——子の子がモリ／＼盛りあがつてゐる
- まるで公設市場のジャガイモですワ
- △——そんな失禮なことよう云ふワ
- 佐野周二、上原謙の舞臺挨拶なんて、
- 僕も映畫スターになりたかつた
- まあ、鏡と相談してからおいなばれ
- △——然し、映畫スターにも末路の哀れなん

- ありますぞ
- 初春早々エンギでもないことを言ひな
- △——でも、これは重大な秘密やからキミだ
- キミの話はいつも重大やな
- △——それ、近頃の話題、例の岡田嘉子と演
- 國境で消えた迷の二人
- △——その二人ですワ、警視廳と國境警備隊
- 春後の思想關係やらう
- △——キミの場合やつたら借金關係に情痴關
- 又、そんな失禮なこと言ふて下さいま
- △——つまり色々取調べた結果、カイモク判
- それは又ごう云ふ譯で
- △——第一、岡田嘉子の生れ故郷が全然判ら
- ハ、御退屈さま

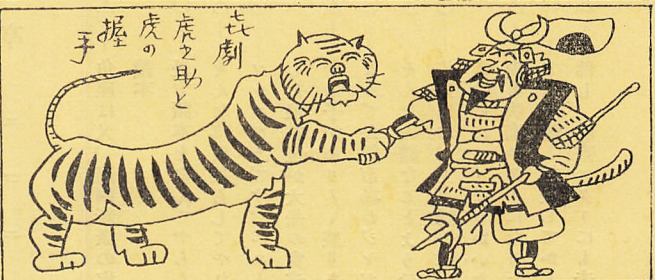


小唄レビユー
 ついてお出でヨ
 コノ装甲車ト
 決して苦勞ハ
 かけやせぬ

當り
 寅歳
 漫筆芝居
 つもた榎大



だんまり
 猫に
 竹



七劇
 虎之助と
 虎の
 握手



虎之皮が
 戦利品の中
 へ
 どうか
 尋ねて
 まいれ
 ッ
 ハー

千支役者

寅

可も

平年

ななら

買けて

いやがも

ばかりは

今歳

まけられぬ

トンカチヤン

(つけの音)



こんな
新演
出は
イケ
ま
かせん
ネ

虎の巻

チユウキウ
マンザイ

○「やあ！お目出度う！今年もたのみまつせ！」

△「先づ明けましてお目出度う存じます……どうぞ本年もよろしく……」

○「あれ！丁寧なことやな、やつぱり絞附着せると柔しうなるのやな」

△「阿呆かいな。新年早々からそんなこと言ふのやおまへん。今年は妾の歳ですがな」

○「へえ？貴女三十六になつたのか！」

△「まあ失禮！妾はこれでも廻り歳の二十五歳寅の五黄や」

○「豪い寅女！」

△「寅女で何んちうこと言ふのや失禮な！」

○「怒り給ふな、豪いと言ふのは他でもないネ皇軍將士

のためのアノ千人針になくてならぬ寅の五黄！日本中寅の五黄ばかりやつたら千人針一時間で出来て了ふのやけどナ」

△「なにを一人しやべつてはるの寅の五黄そんなに豪いの？」

○「豪いとも！千人針に二十

五針ぬへる特點がある！」

△「あうれし！ほんまかいナあしたから万才休業して

千人針の方に廻らう……銃後の貴き婦人の務めで御座いますワ」

然ボクのものにするが……

△「なにやテ？」

○「いや！今年は寅歳であると言ふているんでアル」

△「寅は獣の中でも強いのがで」

○「知つとる！寅は百獣の王でアル！」

△「阿呆やナそりや獅子や！」

○「シ、トラデンいふ歌知つてるか」

△「ゴマ化しなはんナ、何んにも知らんくせに」

○「知らんとはブジョクも甚だしい！ゆういふデマを飛ばされては黙っている譯にはいかん！」

△「それでは何ひます、虎と

猫とはどこが違ひまんね」

○「愚問ぢやナ虎と猫とはち

○エンタク

△クチャ子

やネ第一眼か違ふ虎は猛獸
ぢやから眼光するどく赤味
を帯び見えたりカスンだり
……」

△「そんなん眼がえゝのと違
ひまんが、そりや眼が悪い
のや」

○「ぢやから……トラホーム
といふのぢや」

△「ようまあ、そんなことを
……」

○「どうも女子と小人はニガ
手ぢやナ……言ふてやつて

も、わかるまいが今年の寅
に因んで寅のことを教へて
やらう」

△「ナンテ豪そうにあんまり
智恵のありそうな頭のカツ
コウでもないくせに！」

○「黙りなさい！まづ寅の方
位から教へてツカワそう」

△「すんまへん東北の間を寅
といひます」

○「よう知つとるナ時間で言
へば寅の刻は今の午前四時
正月のことを寅月とかいて

インゲツといふナ」

△「馬月とかいてバケツとよ
む」

○「たつしやな女やナ」

△「虎の威をかる狐ども、い
ふのは丁度あんた見たいな

人のことやナ」

○「何にを馬鹿なこと！サテ
と虎臣とは勇猛なる臣のこ
とである、恐ろしい場所を

のがれた時は虎口をのがれ
たといふぢやろう」

△「雷さんは虎の皮のフン
ドシやし」

○「コレノ、ピロウなことは
放言せんように！同じ言ふ
なら大事な財布のことを、

虎の子といふといふやうに
ナ」

△「へんあんたの言ふことぐ
らい分らん日本人まへん

ワ、ほんなら妾が寅につい
てあんたに後學のために聞
かしてあげまつさ」

○「アレ！」

△「加藤清正は幼名虎之助、
芝居の輝虎配膳、虎が出て
くる國性爺、ドモの又平、

菊畑の虎藏はエ、男ハン、
下手な散髪やがトラガリ、
お饅のおいしいのが虎屋、

船頭がよろこぶ虎猫、虎の
魚がオコゼ、妾の帯止が琥
珀、あんた見たいに口のイ

ヤシイ人がかゝりやすいの
がコレラ！」

○「よう喋るナア」

△「イヤさほども」

○「然しよう、そんなに知つ
とるナ？」

△「あんたが落した紙に書い
たるがナ！」

○「ウワツ！そ、そりやボ、
ボクの虎の巻や！」

十二年より十三年へ

— 松竹・新興・回顧 —

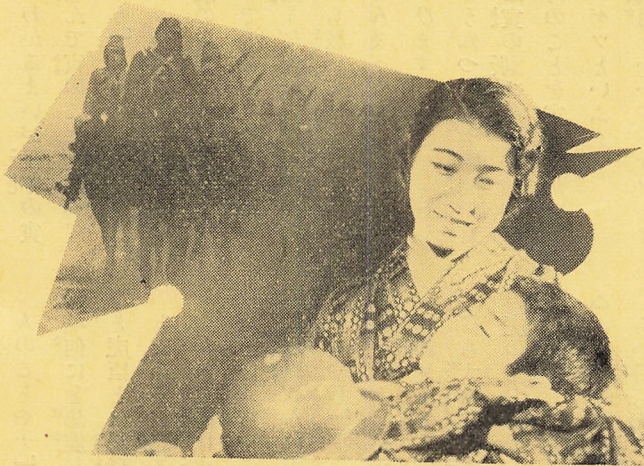
(新興の露營の夢)

○……昭和十二年度の松竹、新興の優秀作品はと顧みれば、

○……松竹では——下加茂で衣笠貞之助の「大阪夏の陣」、犬塚稔の「旅の陽炎」「土屋主税」、二川文太郎の「流轉」秋山耕作の「敵國降伏」、冬島泰三の「番町皿屋敷」、大船で清水宏の「風の中



の子供」「花形選手」「戀も忘れて」「戀愛無敵艦隊」小津安二郎の「淑女は何を忘れた



か」、島津保次郎の「朱と緑」、浅草の灯」「婚約三羽鳥」「花嫁かるた」、野村浩将の「女醫絹代先生」、丸髻混線記」「娘よ何故さからうか」、澁谷實の「ママの縁談」、佐々木啓祐の「荒城の月」等

○……新興では——溝口健二の「愛怨峡」、曾根千晴の「強者の戀」、田中重雄の「熊の唄」「結婚への道」「美しき鷹」島津保次郎の「人生の初旅」、鈴木重吉の「旅路」、久松静児の「乙女十九」の船に、野淵昶の「勤王田舎侍」「吉田御殿」、伊藤大輔の「異變黒手組」、牛原虚彦の「南風薩摩歌」「旗本傳法」、木村恵吾の「さむらひ音頭」、森一生の「祐天吉松」「元祿十六年」「岡野金右衛門」「仁科紀彦「盗人廐」の京都作品まアざつとこんなところだらう。

○……さて、これら邦畫のベストテンを求めるとなると、どうも現代映畫に軍扇があがりさうだ、といふのが一般評で

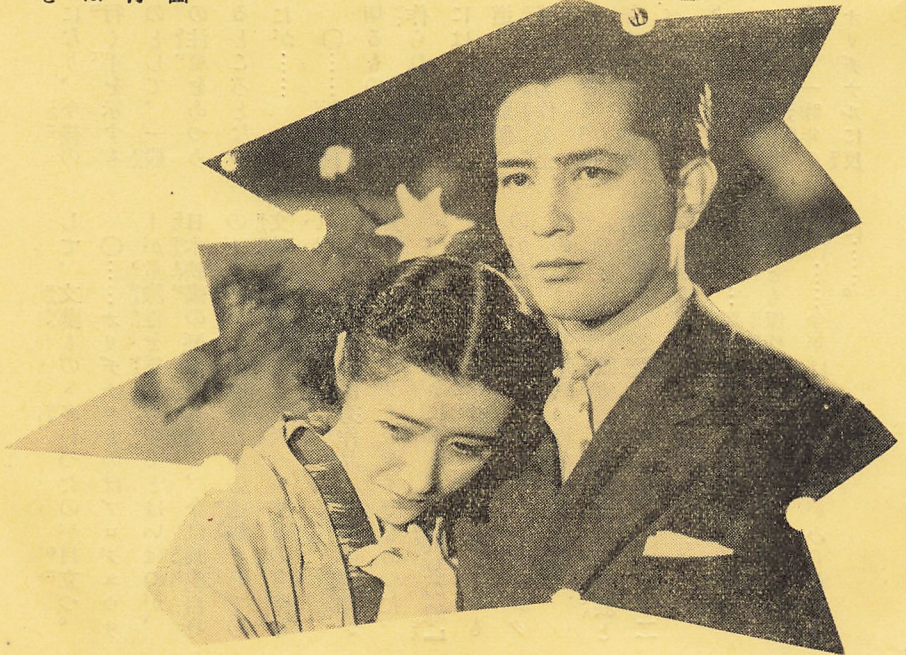
(新興の 静御前)

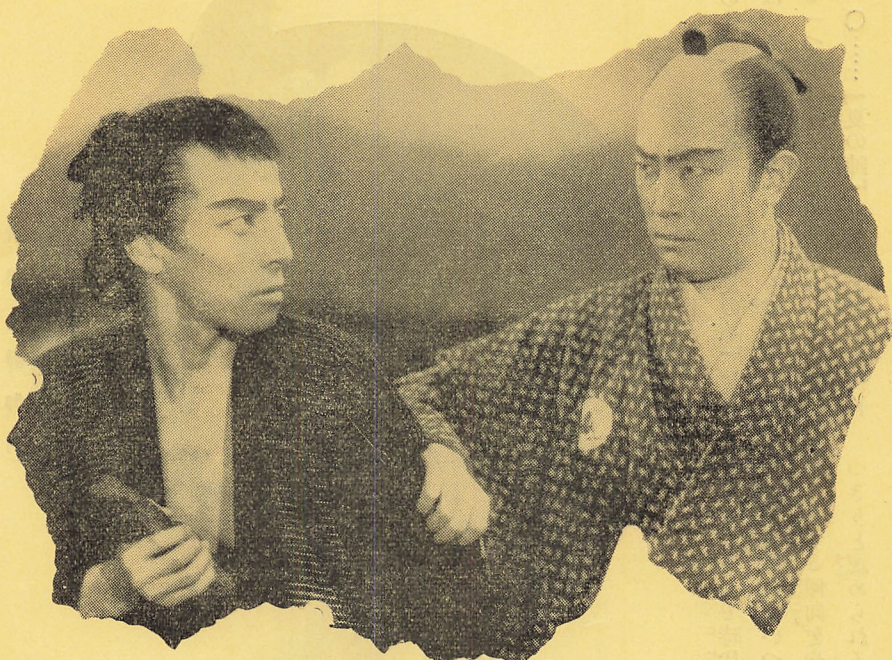


あるが、時代映畫も「大阪夏の陣」などは、その優秀なものの中でも雄たるもの一つではなからうかと思ふ。

○……「夏の陣」を巨費を投じて松竹

が撮るに及んで時代映畫が歴史映畫にはいつて行かうとする傾向をやゝはつきりと認められること





(音觀肌人の船大)

になり、今後の行く手を示すものとして、一般の注意をあつめるところとなつたが……

○……新春封

切るものとして作られた諸作品には一つの道は道として別個に残して力作を企圖してゐるのは新春かけてみるべく、期待すべきものがある。

○……現代映画は、一昨年オリヂナルに反

して、文藝ものゝ多かつたが目立つ。

○……オリヂナルものはプロデュウサーが危険性を感じるのではとはいはぬが、日本映画の歴史から見て、今は映画自身のオリヂナルを生むための過程としての文藝作品時代とは云へもするのぢやないか。

○……今年の優秀作品は題材の選擇が去年よりはヴァライテイでもあつた。

○……あとききになるが「大阪夏の陣」の影響は、他の會社にも及ぼしてゐるものがあり、日本では珍しい、スペクタクルの大作は、先驅的な役割を果した。

○……時代映画の歴史映画への發展と現代映画の文藝ものへのウイंकは十二年度の特異ではなかつたか……。

○……新春に入つて、早くも、松竹、新興とも傑作をドンと放つた。

○……今年は各社の力戦がみられさうだ……。



昨年度の役々

花柳章太郎

顧みて新派五拾週年紀念興行を舉行したことが仕事で、定例の新劇座を事變の餘波の爲め試みられなかつたことが残念でした。

然し本興行に於て、水木洋子氏作『白き一頁』、塩屋國四郎氏作『新らしき地圖』、眞船豊氏作『狐舎』、久保田萬太郎氏作『ふり出した雪』、川端康成氏作『雪國』の五種の演目に今迄と變つた進歩を示したつもりで居ります。

今年は二月以後は第二新劇座を興して新進氣鋭な新人養成につとめたく、又脚本審議會の仕事として豫備脚本創製に今

から努力して居ります。

かへり見て『歌吉行燈』の歌吉、『殘菊物語』の菊之助、『雪國』の駒子など努力したことを公表する自信が持てますが、一層今年は立役が再認識と、阿木翁助氏が文藝部に入つてくれましたので、新聲劇に對する自分等の態度を新らしくして立直りたいのです。

今年度は、新派も今迄の内部統一が積極的に外面に現はれると共に、第二の倦怠期を踏破つて、新らたなるイデオロギーを世間に表示したく考へて居ります。

原稿に書いたやうに來年度は又新しい希望が持てます。

大阪で貴兄に逢へる日をたのしみます。

「演劇新派」の「技道通答」ますます書いて、ますますおもしろく、昔の役者への愛惜を感じます。

この間のやうに寄稿を心から願ひ又参考書を教へて下さい。

新派も來年から教場を作り、公演度に新人を養生したく考へます。

御援助下さい。

大阪へは年春二月か三月か、もう旅へ出てほしいと思ひます。

十二月十二日

章太郎

森 兄

松蔦さん話る

名優座談

日と處

昭和十二年十二月十九日
京三條・大文字屋旅館にて

語るもの 松蔦丈と記者

— 今度は懸け違つてお會ひ出来ませんでしたので、御立ち間際でお忙しい處とは思ひましたが、まるでお話もせずに過ぎてしまふのもどうかと思ふので、一寸邪魔しました私の方こそお伺ひしなればならないのでしたが、つひく失禮してしまひました。

— 今度はお樂でしたな。

— え、すつと遅くなつてから一寸大切へ出なければならぬのは何でした

— が、間では随分遊び廻る時間が有りました。

— 左團次さんも今度は珍らしくやられましたな。併し大した事も無くて結構です。此前やられたのは本郷座の時でしたな。

— さうです、『薩摩歌』の時で……あの時は明治座と掛け持ちでした。本郷座の方は亡くなつた鶴藏さんが一日替つただけで芝居は休んでしまひました。

— 明治座の方は天竺徳兵衛を壽三郎さんが代は

られました。あの時の本郷座へは、たしか中車さん、雀右衛門さんが出てゐられて、『毛谷村』が出てゐると思ひます。

— 新春は中座で『阿漕』が出ますが、あの春姫は別に仕處も無い割に、一寸厄介な役ですね。

— 私はまだ演じたことがございませぬが、何しろ姫といふ名が附いてゐる位で世話女房の姿であつて、何處か品が無くてはなりませぬので、丁度『渡海屋』の典侍ノ局です。拵へも同じです。

— この間大阪の歌舞伎座で『竹中砦』が出ましたがあの千里はお演りになつ



たことがありますか。

あれも未だ致してゐません。團十郎さんが東京で

なすつた時は、私は子役

でゐまして、あの時の千

里は蓮女さんで、師匠（

先代左團次）が三枚目の

御注進と木下藤吉を演つ

てでした。

あの千里は……犬清もさ

うですが、手負になつて

からが長帳場で、演る人

はかなり大變だと思ひま

す。

昔はあの咽喉を突く矢が

仕掛けでぶら下つてゐて

鞆を合せる型などがあつ

たやうです。

この間の鶴之助も稽古に

は、矢で咽喉を突く型で

してゐたさうですが、そ

れでは見た目が悪いとい

ふ注意があつたので、後

には乳の下を突くことに

してゐました。

それはその方が形がいい

のですが、どうも若さ

といふものは無くなる

やうですね。

さうお思ひになりませ

ん？

成程、御尤なお説で

す。これはいい事を伺

ひました。もうこれだ

けでも、お訪ねしたか

いがありました。

いえ、恐れ入ります。

大變長座しました。お忙

しいさ中を相濟みません

新春は東京へお出掛けで

すか。

出来れば芝居の見學かた

く久しぶりで東京の空

氣を吸ひたいと思つてゐ

ます。

お出掛けでしたら是非お

立寄り下さいまし。

有難うございます、御家

内へ宜しうお傳へ下さい

天婦羅と佛蘭西料理

喜久屋食堂

道頓堀式橋北詰南(75)番



阿漕と扇屋熊谷

高谷伸

偶然ノートを繰つてゐると四年目平均ぐらゐに狂言が廻つてくるやうなので芝居道も周年並みだと思つたことがあるが、今度の阿漕や扇屋熊谷は久しぶりのもので定型打破の點で推賞できると思ふ。

芝居好きの母に育てられて、おそろく胎の中から芝居を感じてゐたであらう、私は小學校へも通はない幼時から京都で芝居を見て、大正初期から道頓堀へも通ひ出したものではあるが、この二つとも道頓堀では一度も見えてゐない。歳末繁忙の際番附を調べてゐる暇がないが、三十年ぶりぐらゐにはなるのではないのか。しかし、どちらも全然舞臺を見てゐないのではない、大阪

以外で見たものの印象を述べることとする。

「勢州阿漕浦」はもと「田村麿鈴鹿合戦」といつたものだが平治住家を中心なのでいつかこの題で通つてしまつたものである。扇屋熊谷も通稱で「須磨都源平躑躅」が「源平魁躑躅」になつてゐる。

阿漕は寛保元年、扇屋は享保十五年だから扇屋の方がすこし古い。しかし、どちらも近松が没し出雲、松洛、千柳のコンビの出現しない過渡期の作品である。

阿漕の作者は淺田一鳥と豊田正藏である。現在演ぜられるのはこの殺生禁斷の阿漕浦へ平治が網を入れる場と次の平治の内

で平瓦治郎藏が悪と見えてゐても實は音と訓の讀み違ひを利用して身代りになる所との二場である。

性根としては平瓦治郎藏のモドリ（悪人が善心に寝返る）ことが中心でこれが座頭役、平治は書き出しの役である。殺生禁斷の場所は今日の禁漁區域で往昔は歴史的理由からさうした場所が多く、歴史的因縁は神秘的幻想を伴つていろいろの物語を生み、戯曲で殺生禁斷を背景にしたものに『競伊勢物語』などがある。私がこの狂言をはじめて見たのは大正三年六月の京都座で治郎藏は後に眼玉となつた市十郎だつた。この時既に老齡に入つて足もとなど怪しかつたが、名人多見藏を想像させるふつくりした肉體と、眼玉といふほど大きな眼とが特長で治郎藏の見得の立派さは寫樂の繪を思はせ、その時ばつと開いた五本の指が美しい浮世繪として今だに目に殘つてゐる。小紅屋のやうな大味な役者は今ではちよつと無いし、こんな人でこの芝居の味がびつたりするのだと思ふ。この時の平治は實川正朝になつて死んだ中村扇駒だつた。最近ではこの夏神戸で猿之助の治郎藏を見た。小紅屋とは違つて現實的な強さで見せたが、扮装は時代に赤ッラで小紅屋のはそれ程でもなかつた。猿之助は内場の場より浦の形のよさが印象が深い。この時の平治は訥子で當時の關中に劇評を書いて置いた。猿之助は一兩年前東京で友右

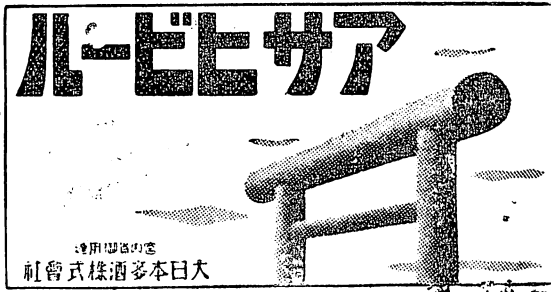
衛門と共演したし、東京では幸四郎、壽美藏で帝劇で出たこともあるが十數年以前になる。延若の治郎藏は楽しみにしてゐるものゝ一つである。

扇屋熊谷は長谷川千四と文耕堂の合作で千四は同年に石切梶原を書き、文耕堂と千四の合作ではこれに續いて、鬼一法眼三略巻や檀浦兜軍記があつて二人はしきりに、源平鬪争時代を背景に書いてゐる。これも京都五條御影堂前の扇屋上總の内へ敦盛が女装して匿まはれてゐる所へ熊谷が追捕の姉輪を追ふて五條橋の出會ひになるので、熊谷敦盛と牛若辨慶とが混線したやうな作が時代の大まかさなのだが、後に出來た並木宗輔、淺田一鳥、浪岡鯨兒、並木正三、難波三藏、豊竹甚六の合作の一谷嫩軍記の方が作がすつきりして傑れてゐるので、それに熊谷も敦盛もお株を取られた形である。御影堂前には私たちの子供の頃には扇屋が何軒も並んでゐて都市計劃で變な位置になつたが今も殘つてゐる扇屋がある。五條大橋のすぐ近くである。

私がこの芝居を見たのは大正七年十月京都南座が初である。その時は故嵐巖笑の熊谷で我童（現仁左衛門）の敦盛、廣三郎の桂子、瀧十郎（後銀十郎故人）の上總、故大吉の下女で阪東壽三郎が姉輪平治をやつてゐた。巖笑の熊谷はもそもそしてゐたが骨董價値があり壽三郎の姉輪は眞面目で面白くなかつた記

憶がある。馬芝居といつてみんな馬にのつて出る小屋がけの芝居で見たこともあるし、満洲へ行つてゐる市川右治丸が死んだ中村小福と二人で京極で出した時、熊谷が見得をきつたとたんに馬が小便して大騒ぎしたことがある。この時は熊谷教盛とも本物の馬を舞臺に出したので、こんなことになつたのであつたその頃青年歌舞伎系のこの連中はよく圓山公園へ馬乗りに行つてゐたので本物を出したらしかつた。延若の熊谷は旅では出たやうに思ふ。宗十郎の教盛は東京で演じてゐる筈だ。

とにかくわれわれでさへ指を屈する程しか見てゐない狂言が二つも正月の中座で並べられたことはうれしいことであつて、過般の竹中碧の好評だつた副産物であらうが、古劇復活の意味で面白と思ふし、かういふ狂言を求めるならばまだまだ探すことができるし、心當りだけでも二三はある。



廻り歳の俳優と

干支に因む狂言

虎は千里を駆けると云はれ又、剛情だと云はれる寅歳生の劇壇人を左に紹介する——梨園では成駒屋の御曹子中村扇雀、市川小太夫、市川團次郎、前進座の河原崎長十郎、新派の吉田正雄（明治三十五年生）曾我廼家大磯、森律子河村菊江、米津左喜子、山中國九郎、岡本五郎、澤村半十郎、市川桔代三郎、阪東嘉好阪東家太郎、尾上菊四郎、尾上鑄造、中村歌五郎、中村吉

次（明治二十三年生）文樂の豊竹古靱太夫、豊澤廣助（明治十一年生）等、尙寅に因む狂言で代表的なものは「國性爺合戦」和藤内の虎、「朝鮮征伐」清正の虎「吃又の虎」又役名では大磯の虎、加藤虎之助、五代目が「お傳」と二役で評判を得たのが虎吉、「菊畑」では虎藏が虎の巻を頂戴する程度で頗る妙いが、新國劇の秘藏狂言「江戸の虎退治」と云ふのがある。



實 說 鏡 山

梅 徑 莊 主

昔の芝居では、狂言の立て方が先づ季節と並行してをりまして、今日のやうに雪の降る時分に櫻の咲く舞臺を見たり、夏狂言に雪の場面があつたりするやうなことはございませぬ。又、狂言の並べ方にしまして、曾我の「對面」や中幕物が大切へ廻つたりするやうな亂雑なことはございませぬでした。元來この曾我狂言などは正月芝居に限られてをりましたし、「鏡山」が三月の交代り時、「忠臣藏」が十二月、顔見世に傾城物といふのが吉例でございました。

これからお話しようとする「鏡山」が當時大當りを取り、今度の中座にも上演されてをりますが、百五十年後なほ生命を保つてをりますのは、無論、作の力ではあります。一つは御殿奉公する者の宿下りの月に當つてをり、狂言そのものが、その人達の生活をその儘寫し出してをりますので、大いに共鳴する處があつて評判になつた次第でございます。

この「加賀見山舊錦繪」が江戸の操りにかゝつたのが天明二年の正月、歌舞伎に初演されましたのは翌年の四月でございませぬが、併しこの事件が起つたのは享保九年四月のこと、その間に五十九年の月日が経つてをります。際物のやうに見えて際物ではございませぬ。それが大評判になりましたのは、前に申上げた譯からであります。一つは作者が主人公の尾上を町家の娘としたのが、御見物の同情を惹くことにもなつたのでございませぬ。併し實説では町人の子ではなく、身分は卑しいが侍は侍で、娘にもこの武士氣質が傳つてゐたのでございませぬ。この尾上、本當は岡本みち、父は岡本

佐五右衛門、元は大和郡山の本多家で千石取りの侍で相當のものでしたが、主家に世繼が無い處からお家斷絶で浪人となり、此時に本名の正木を女房の家の岡本に改めたらしうございます。さうして今は旗本の用人で、僅か六十石、昔に變る寂しい暮らしてありました。おみちの下に三五郎、みやの同胞があり、おみちは十八の時、縁あつて松井周防守康豊の奥へ御小姓に上つたのでありますが、間もなくお夜具拜領のお手付中老となつて一方ならぬ殿の寵愛を受けてゐたのでございます。併し高い樹には風が當るの聲で、その寵愛ぶりを甚だ快よからず思つてゐましたのがお芝居の方の岩麿に當る老女の澤野、これは奥方の附人として、興入れと同時に里方から來て奥向一切を委されてゐたのであります。

さて事の起りは芝居の方にも採り入れである上草履一件からで、實はおみちの

粗忽であつたのでございますが、澤野の咎め方もかなり悪どいもので、これをきツかけにおみちを中老の位置から一蹴りに蹴墮してしまはうといふ腹であつたのでございます。

時は四月の黄昏時、殿が杜鵑の初音をおみちにも聞かせたいといふので、奥方と同座の酒席へ急のお召し、おみちは遅れて殿の機嫌を損つてはと、そこへに身仕舞して、周章で御前へ出たのでありましたが、その時穿いた上草履が自分の物ではなく、不幸にも彼の澤野の替草履でございました。

おみちも己の倉相と知つて廊下に手をつき、懇懇に宥しを請うたのであります。が、元より澤野の容易く承知する筈がございませぬ。

おみちは胸のあたりに草履を打付けられては、流石にハツと氣色はみましたが蟲を殺してその場はそのまゝに濟ませま

した。

始終の様子を見乍ら手出しもならず羞し控へてゐたおみちの下婢おさつ——即ち芝居のお初で——澤野が憎々しい素振りて立去つて了ふのを待つて主人を勞り助けて部屋へ戻ると、手料理や酒をすめて一向に慰めました。おみちはおさつの心盡しを無にせぬやうと、すゝまぬ乍ら酒も呑み、様々語り合ひもして臥床へ入りました。そしておさつの寝つくのを見定めると、書置を書いて文箱へ入れ、手廻りの道具などを取片づけて文庫に收め、床の間に名號の懸物を懸け、香を焚き、辭世の一首を書き了ると、既う空は白み初めてゐました。

そこでおさつを呼び起し、件の文箱と文庫を兩國矢の倉の自宅へ届けるやうに言ひつけました。

虎の門内の館を出て十町餘り、日比谷門のあたりへ來た時、おさつは何となく

ハリキリ新春

嵐 吉三郎

おめでたらうございます

戦捷の初春——日本中がハリ切つてゐる新年ですれ。

さて昨年——と申せば遠いが——私の弟が、うらやましくも應召の光榮に浴しまして、出征した時のハナシですが、どう間違つたのか、ドン／＼贈られる旗などが、全部私の名になつてゐるぢやありませんか。驚くよりキマリが悪くて……。當人は私の氣持ちを察して「ナニ、あなたの分までヤツテ來ますよ」と勇んで發ちましたが、私も我れ知らず興奮して、涙がこぼれんばかり嬉しくなり「征つて來い、そのかはり、銃後のことはお前の分まで引受けた」新春を迎へて、ひし／＼と迫るを覺える全國のハリ切り——、私も更に勇ましく、所信の道にいそしまればならないと存じてゐります。

胸騒ぎをするのを覺えました。昨夜主人おみちから帯や小袖、袴など身分不相應な品々を與へられたのも、常より一入情の籠つた言葉を懸けられたのも、今思へば何か不吉の事の前の兆のやうな氣がする——これが蟲が知らすといふのではないだらうか——さう思ふと、おさつは足も進まず、矢の倉への御使は第二として、兎も角も館へ取つて返して、様子を早く知りたいと、足を空に駈け戻り、おみちの部屋へ飛込むと、先づ香の薫りと、たゞならぬ物の氣配を感じました。

立て廻した屏風の蔭には、夜の具の上に白小袖を血潮に染めたおみちの痛ましい姿を見出しました。

若しやと思つた凶事をまぎ／＼と目前に見て、泣いて足摺りして嘆きました。さつと氣を取直すと、復讐の念を胸に包んで、澤野の部屋を訪れ、主人が俄病で正氣づく様子も見えぬ故、恐入るが一

度見舞つて頂きたいと申出しました。

奥向の用件一切は自分の責任にあるので、澤野は兎も角もおみちの部屋を訪ふことにしました。

澤野が屏風の裡へ聲を掛けながら這入ちうとする後から躍り懸かつて打倒すとおみちの血染む懐劍を執る間も無く、澤野の咽喉へ突刺しました。

おさつは意外にも安々と仇討つことが出来まして、此上は掟通りの仕置を待つばかりでした。

併し、おさつの身に加へられたものは刑罰ではなく、颯からの名譽の沙汰でありました。

即ち改めてさつを中老に召抱へる旨の達しでありました。

これと同時におみちの父の希望で、さつを岡本家の養女としたので、乃ち兩姓から一字づつを取り松岡と名宣らせて奥勤めさせることになりました。

春の中座

大橋孝一郎

中座が毎年の正月興行に、復古歌舞伎と銘打つて、昔ながらのしきたりや、埋もれた狂言の復活上演を試みるやうになつてから、かれこれ五年近くになるであらうか、今ではもう立派な年中行事の一つとなつて、春芝居の長閑さ、理づめを抜いた大まかな時代の味をふんだんに楽しませて呉れる。上方歌舞伎の情緒も、今では此の興行が一等味合ひが深いのではないだらうか。

「關西歌舞伎の行くべき道」と、とくに取沙汰される關西歌舞伎も、よく現今の風潮を辨へて、十月十一月と打續けた一致團結の仕事は、此の際決して無駄なことではなかつた。軌道に乗つた——そう云つた安意さを心のどこかに覺えるのである。

今や國家は國民精神を總動員して、目下の非常時局を克服すべく邁進してゐる。關西歌舞伎も俳優諸君が、各自の演

劇精神を總動員されて、現下の多難な局面を打開して、將來ある關西歌舞伎の指針を樹立するべき絶好の秋ではないだらうか。

正月興行の復古歌舞伎は、古典の復古上演や、古いしきたりの保存方法の役目のみがその全ての使命ではなからう。私達の要求するものは未だ未だ根深い内面的な機構と精神であるべき筈である。

それに就いての當面の問題として、色々な興行方法が考へもされやうが、一方一般の觀客も、單なる外形だけの好みに捉はれずに、彼等の仕事を育てるために、温い心眼で見守るだけの雅量がほしい。それが關西歌舞伎の進展する何よりの糧であるべき筈だ。

それから、若手の人々にもつともつと腕を伸ばせる機會を與へること。二年ばかり前だつたか、晝間興行に二三回試みられた若手歌舞伎の政策は、算盤だけの

問題で考へると、成る程、精算のとれないものかも知れないが将来の捨石として意義深い興行だと思ふのである。

毎度東京の政策を引あひに出して恐縮するが、東京では此の一月から、従来我が當、勳彌一派の青年歌舞伎に對抗して家橋、菊之助、松緑等を動員して、新たな若手歌舞伎を組織し、お互ひに鎬を削ることになると云ふが、如何にも活気に燃えた若手にふさはしい興行政策として注目すべきだと思ふのである。競争意識のないところに絶対に進歩は期待出来まい。競争心を燃え立たせること、良い意味での敵愾心を起させることが、やはり發展への要素とならう。それに加ふるに時藏、八百藏、男女藏等が結束を固めて、中堅歌舞伎をも組織することになると云ふのだから、大幹部の連中も、これではおちおち落着いても居れない譯だ。

私はあながち東京歌舞伎に左袒するものではないが、かうした意氣込だけは、今迄から關西方に比して羨望に堪えないものがあつたのである。

しかし、幸ひに現下の非常時局を得えて俳優諸賢も緊禪一番、意氣物すさまじく立直つて、關西歌舞伎のために萬丈の氣焔を吐かんとする意氣のほの見えることは、劇壇全般のためにも眞に慶賀に堪えないところと申さねばならない。

中座の初春興行に撰出された狂言の中で「阿漕浦」と「扇屋熊谷」の珍重味を延若、壽三郎等の持つ上方古典の眞髓手法で如何に發揚するであらうか、また『夜明前』『船場繪曆』に梅玉、魁車等が如何に野心的な演技を示すであらうか、昭和十三年劈頭の關西歌舞伎は、眞にバラエティに富んだ期待を私達に打げかけてゐるのである。

結核にオウワリ
花柳病科
藤原医院
電話 二六〇六番
戎橋筋ノ側入

飲み友達

榎本緑之助

道頓堀の角座に四年の永い間本城を据えて、打ち續けてゐた關西新派も愈々解散してしまつた。そしてその一座の人氣男の一人であつた畑穰君もこの四月上旬とうとう歸らぬ旅の人となりました。私と畑君は樂天地華やかなりし黄金時代當時、二枚目として賣出してゐた頃、南地でカルトンと云ふ酒場を經營してゐた友人のK君に紹介されて飲み友達の一となつたのでし

た、私が聲劇座を組織する様になつて愈々その飲む機會も多くなり、逢へば必ず二三軒は飲み歩きました。私が彼に負ける事は如何に飲み疲れても實によく食つた事でした、ラストは必ず飯町のちんころに行つて彼の好物のひものにぎりや二皿ほど平げ、尙鐵火卷の一つでも食べたい様な顔をする彼でした。

こんどの死も腸チビスであつたから彼を知る人々は、

あんな達者な男が死ぬとは思はなかつた、併し彼はよく食つたから、

と如何にも大食する事が原因の様にいつてゐたが、決してそれのみによるのではなく、手當の遅れた事が唯一の原因でありました。月の十日が彼の命日になるので過ぐる八月の眞晝の日盛

中座古狂言解題

世話垣鈍文

春・中座の復古歌舞伎には随分珍らしい狂言が二三上演されますので、簡単な狂言解説を左に述べてみようと思ひます。

◆鏡山舊錦繪

享保九年四月三日のこと、石見の國濱田城主松平周防守康豊の江戸虎の門の邸で、澤野と云ふ局が、側女みちが草履をはき違へたのを罵つて侮辱を與へたので、みちはこれを憤り、面目上自害し、みちの侍女さつが澤野を刺して復讐した實祿に、有名な加賀騷動の一件をアレンヂして脚色された義太夫狂言で全篇は十一段の長篇であります。

しかし第六段目の草履打と第七段目の復讐の場面が全篇の山でもあり、作品の價値もこゝが勝れて居りますので、たいいていこの場面のみが上演されて參つて居ります。

初演は天明二年正月（百五十四年前）の江戸薩摩外記座で、大阪では翌年二月の竹本座で御座りました。作者は容陽篤、こ

りにお基まわりをするべく友人のK君と天王寺の基地へゆきました。生前ビールが好きだったので、途中冷えきつた朝日ビールを一本買ひ求め、懇ろにお花とお線香をあげ、そして友人とコップで一杯づゝ飲み残りを石碑に注ぎかけて仲のよかつた飲み友達にあの世とこの世からの乾杯をしました。ビールの泡は今も釋降直と刻みこまれたところへ吸ひ入るやうに流れ落ちてゆきます。八月の午後一時の太陽に火の様になつた石碑も、冷たいビールの泡に浴して地下に眠る如君もさだめし舌づゝみをつつて涼しく思つた事だらうと思ひました。

もごりますが、彼がまた病氣にならない二月の始め、如君から上海ゆきの話を受けました。それは私の聲劇座と如君の一派が合流して、上海で公演をやらうといふプランで、如君は上海の一流料亭〃月の家〃に縁故があり私も恩師大森痴雪先生の縁故によつて〃六三亭〃に後援を願ふ事が出来るので、如君は四月興行限り關西新派をやめる事となりましたので、私はすぐ上京して色々準備に取りかゝらうとした矢先に、如君の病氣のため一頓挫をきたしました。歸京するなり桃山病院に病床を訪れました、髭は延びて大變衰弱してゐましたが、元氣に口をきいて笑戲の一つもいつてゐました。準備も整つたから何日頃上海に行けるかと尋ねると、この病

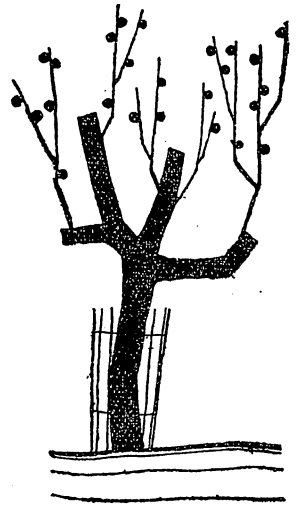
の人は下谷の町醫で松山某と云つた人だそうで御座のます。

◆勢州阿漕浦

本來此の狂言は「田村麿鈴鹿合戦」と云ふのが本題で、全曲五段よりなる義太夫狂言ですが、四段目の阿漕浦と平次住家とが引放して上演されることから、「勢州阿漕浦」と改題されて終つたので、初演は寛保元年九月(百九十五年前)の豊竹座で、作者は淺田一鳥、豊田正藏で御座りました。それより以前「あごぎの平次」と云ふた淨瑠璃があり、これと謡曲の田村の系統を引く紀海音の作「坂上田村麿」とを取交へて脚色したもので、歌舞伎の舞臺に移されたのは文政二年十月の中村座で、次郎藏を芝翫、平次を我童で上演されたのが、古い記録として殘つて居ります。

◆蜘蛛糸梓弦

この狂言は尾上家の家の藝で新古演劇十種の一つである「土蜘蛛」の原型とも云ふべき狂言であります。「土蜘蛛」に關した作品では、謡曲の「土蜘蛛」を筆頭に、古淨瑠璃にも「土蜘蛛退治」と云ふのがありましたが、近松門左衛門の淨瑠璃「關八州繫馬」で、小蝶の怨念が土蜘蛛と化して活動するやうに脚色されてからは、その後の作品に大きな影響を與へ、所作事變化物の中で一つの系統を形作るに至つたのであります。その「



軍事
美談

劇文壇二人上等兵

☆☆☆ 豊田 豊

時節柄劇文壇軍事美談を一席。

人間の運命に慙うまで似た一対があるものでしやうか。こゝに語り出します二人の劇作家は全く運命の双生児といふべく、新しい言ひ方をすれば運命の双曲線を描いて、人生のコースを辿つて居る二人なのであります。

T・Oと言へば今を去る十年前、プロレタリア演劇華やかなりし頃、「喰ひつけ支那!」の翻譯で鳴らした當時の劇作界に於ける寵兒であります。又K・Nと言へばそれも恰度同じ頃文學青年、劇作青年の眺望の的となつた中央公論の「文壇アンデパンタン」に北林造馬とともに唯二人選ばれて、華やかな當選の光榮を荷つた幸運兒でありました。當時にあつては今日の芥川賞、直木賞にも必敵したでありました。そのK・N君の輝く當選作といふのがやはり支那のプロレタリア運動を主題とし

た「南京革命悲史」とか何とかいふのであつて、二人が同じ頃同じ特異な支那物を以つて文壇、劇壇に聲名を馳せた點も似て居ますが、年もK・N君が今年三十八、T・O君が今年三十七歳、僅か一つ違ひであります。その當時T・O君は東京松竹の文藝部に居たし、K・N君は間もなく松竹への反逆意思熾んだつた前進座の文藝部へ這入つた。總てT・O君も松竹から出て反松竹的な立場に立つ事になり、二人の境遇はいよゝ近似して來たのであります。さうしてその後兩君とも新國劇で一回、前進座で一回宛大劇場劇團によつて上演され、いよゝ新興劇作家としての氣を吐くに至つたのであります。少しく枝葉に入つた事ですが、その兩君の兩劇壇に於ける一回宛上演作といふのが二人とも新國劇の方が創作劇、前進座の方が脚色劇であつたといふ事實も不思議な一致と言へるではありませんか。

閑話休題。その人間の運といふ奴をT・O君とK・N君の運命の對照に於いて僕は益々感ずるのであります。さしも擡頭當時華やかであつたT・O君とK・N君はその後その劇作運が餘りパツとしなかつた。T・O君、K・N君ともに劇團關係を離れるし、その間にいろく時勢の推移もあつたり新しい作家も出たりして、僕達は忘れるともなく二人を忘れて居ました。さうして時々二人の話が出ると、僕は由來「劇作家返り咲説」を信する者であるから、……これは詰り一度劇壇の堅い扉を押し破る程の者ならば、たとへその後何年かの不遇があつても、その離伏時代に養つた修養や交際や自己反省に依つて何年かの後には必ず返り咲きするものであるといふのが、その僕の運命説の要旨であります。最近の山崎紫紅を觀よ、乃至額田文福關口次郎、高田保を觀よ、金子洋文も永田衡吉も又さうであつた。いや寧ろ僕に言はしむれば一度不遇になつて立ち上つた者こそ、すつと順調で押して來て居る者よりも人生修業をして居るから、反つて力強い確つかりしたものを持つやうになる。……だから二人もそのうち又時を得て、再び又「喰ひつけ支那！」や「吼へる南京！」をもたらしして劇壇に捲土重來し來るであらうといふ具合に、噂をして居たのであるが、由來僕は誰に對しても樂觀者なのである。

ところが僕のその豫想は的申した。的申したといふ程ではあ

りませんが、今年の二月頃本邦劍道界のオーソリチイ高野弘進が大いに演劇運動に野心を持つて、演劇による劍道鼓吹をモットーとして劍の劇團「國正劇」なるものを創立した。その前頃からK・N君は僕の「劇場」の雜文を書いて貰つたりして居た關係でちよいく僕の家へも遊びに來て、僕は家庭的にも親しくなつて居た。時には校正なども手傳つて貰つて居ました。當時K・N君は昔からの友達の新劇作家の和田勝一君の家に同居——まあ半ば食客の形の同居生活をして居たのであります。その和田君の家を出てどこかに下宿をするやうになつてから暫らく僕の家にも遊びに來なくなつて居ました。

一方T・O君は長い間消息を聞きませんでした。國正劇旗擧後間もなく、その旗擧の時「劍客往來」を上演した小林宗吉君から、T・O君が國正劇の文藝部主任に就任した旨の報らせを受けました。といふのは僕のある大衆雜誌に連載した長編小説が國正劇の内容に適當するといふので、僕自身脚色する事になり、その正式の依頼をT・M君から改めてするからといふ書信があつて始めて僕はその事を知つたのです。僕はさうしたビジネスの事は兎に角として長年沈湎して居たT・O君がたとへ國正劇がまだ海のものとも山のものとも解らないにせよ、兎に角劇團生活に復活した事を、T・O君の運命のために心から祝福したのであります。

それから間もなくT・O君から前記の脚色に就いて脚色は何幕、時間は何時間、上演料はまだ建設時代だからこれ／＼と正式の依頼があり、そのためT・O君は数回僕を訪ねて来た。何んぞといふと酒になる癖の僕はその度んびにT・O君を相手に酒、酒、酒となるのです。このビジネスの開始されるまで僕はまだT・O君をそれ程よく熟りませんでしたしが實に酒、酒、酒と言はねばならない程T・O君も僕に劣らずよく飲むのです。話に聞けば、さすがの僕にも絶対にそれはありませんが、T・O君は原稿を書きながらでも傍らに酒を置いて酒をやるという事です。強敵現る！の感深しと言はねばなりません。

一方K・N君も夙に僕の酒友であり實に又彼もよく飲むのです。それが鱈か大蛇か……いやそれ程ではありませんが、兎に角品の良い飲み方ではない、妻君に敬遠される方の豪傑酒である。彼にも又強敵現はる！の感一しほ深きを覚えて居たのであります。

どこまで似た二人の双曲線でありませう。T・Oと君K・N君とは實にやその現代離れのした大酒飲みである點に於いても種族的共通性を持つて居たのであります。と、和田君の家を出て暫らく消息を絶つて居たK・N君が和田君ともどうして居るだらうと時寄り心配して居ると、何んと又彼も又國正劇の宣傳部に這入つてT・O君と等しく高野氏の道場で暮らすやうに

なつたと、一信雁の便りがありました。僕は何かしら魔に襲はれたやうな感じがして瞬間啞つと思ひましたが、次の瞬間にはT・O君よりも親しくその人と接して居たゞけにT・O君の場合よりも一層彼の劇團生活への復活といふよりも、新就職を家内とともに祝福したのであります。

だが折角二人のために喜んだ甲斐もなく、總ては新國劇、前進座に伍する一流劇團なれかしと祈つた國正劇はその後餘り揮はず殆んど旅から旅へ興行して居る有様で、東京公演の時華やかにやる筈だつた僕の脚本も自然立ち腐れとなり、僕も氣乗りがしなくなつて居ましたが、いよ／＼今年の夏頃國正劇も行詰るところまで行詰つて、殆んど解散状態に陥りましたが、K・N君は主宰高野氏の意を帶して僕のところへ謝罪やら陳情に現はれた。

最初T・O君を代理として頼まれたものを今度はK・N君が代理として断りに来るのも不思議な縁であります。が、解散になつた以上は仕方がないからと、彼が和田君の家を出て以來の久し振りの會合なので僕も懐しく庭の青葉を見ながら又二人はビールとなつたのであります。そこへヒョッコリ現はれたのがT・O君であつて、用件はK・N君と同じであつたが、もう僕はK・N君と一切諒解して居るので、それよりもビールといふ事になり、こゝに改めて我家に於けるT・OとK・Nとの盡きせ

ん縁の運命双曲線は一線に相結ばれたのであります。

聽て二人は仲善ささうに僕の家を出て行つたが……あゝ思へば二人に僕が會つたのはそれが最後であつた。時恰かも日支事變醜はにして、苦熱の下、皇軍は北支に上海に勇敢無比の奮戦を續け武勳赫々、世界の戦史初まつて以來の歴史的大激戦は新聞にラヂオのニュースに日毎に報ぜられました。さうして驛々には出征兵士を送る悲痛なる萬歳の叫びが日毎に昂まり、『忠勇無双の我兵は、歡呼の聲に送られて……』の軍歌は僕の家の四隣にも響き、僕の今年四つになる子供までが部屋の中にその軍國情緒を薙き散らすのでした。

と、國正劇の解散とともに相共に再び依然の浪人生活に逆戻りさせられたT・O君とK・N君のその後の歩みに僕達夫婦は窺かに心配して居たのでありますが、T・O君は幾何もなく輝く出征兵士として江南の地、上海攻略戦に上等兵として派遣せられるやうになつたといふ快報を耳にしたのであります。それを聞いた時僕は軍事劇團國正劇の前文藝部長として、これは友田恭助の出征よりも相應しい、なまなか内地で臭つて居るよりも、どれだけT・O君のために幸運であるか知れないと、勇士T・O君の武運目出度からん事を祈つたのであります。

と、それから半月も経ちますまい。どこからか夜遅く僕が歸つて來ると、家内は早速僕に報告して……

『今日留守にK・Nさんが見へましたね……』

『うむ』僕は餘り興味がなかつた。

『いよ／＼出征する事になつたんですつて』さうして饑別の代りにビールを出して、家内は彼の行を痛つたといふのである。それを聞いて今度は僕は愕然とした。のみならず間もなく和田君に聞けばK・N君もT・O君と等しく上等兵として上海へ出征する事になつたといふ事。僕は心から運命の魔を感じた。

爾來皇軍の戦績赫として、T・O君の上等兵としての勇敢なる活躍は譚賣、時事等に華々しくトツプ・ニュースで報道される。K・N君又田上部隊に屬して彼の有名な蘇州敵前上陸の一員たり、遂にその勇敢なる突撃戦に負傷、野戦病院のベッドに横たはる身となつた。共に往年支那に於ける列強侵略と干犯の暴狀に憤慨して感激の名編を生んだ華形作家二人、今はそれが轉じて抗日の暴舉となるに至つた暴戾支那を膺懲且つ眼覺しめる皇軍聖戰の軍に華形勇士たり矣。又不思議と言はなければならぬ勇ましい哉T・O！素張らしい哉K・N！

そこで僕は世に大呼していふ。

劇作家だつて神經衰弱病患者ばかりの寄り集りのやうにばかり思つてくれるな。僕の身邊にだつて恠ういふ肉弾を以つて演劇する勇士だつてあるんだ。蓋し最近劇文壇の拾ひものといふべく、お粗末ながら軍事美談『劇壇で拾つた話』の一席。



昨年度に私の観た舞臺は、歌舞伎と新派に限られた感があつて、その多くが大坂を主にして神戸、京都の順で、東京では東劇の左團次一座ぐるゐるものであり神戸、京都とて云ふにも足らぬ程で、主なる大坂にしてからが、見たいとおもふものゝ多かりぐひに過ぬので、大半に涉つ

昭和十二年の 舞臺と今後の希望

渡 邊 紫 染

て観て居らぬ分に存外いゝのがあつたかも知れぬが、茲には観た分だけに就て述べて見る。

最初「昨年中での印象に残つた舞臺」といふ問ひに打突つた時は、さてドンナ舞臺を見たかなあといふ、頗る薄ボンチャリとした、捕捉し難い感じて一ぱいになつたことは事實である。それだけ印象に残る程の舞臺を観てゐなかつたと謂ふことにもならう。

ところで臆か出して見ると二月には大坂歌舞伎座で、丁東詞庵作の「いろは新助」を観てゐる。上方狂言の「いろは新助」を一幕に纏めあげたところに味噌もあれば、何かもあるのであらうが、野崎まゐりの郷土色をふんだんにとり入れてあつたのには好感が持てたが、純上方のコンナ狂言を見せられると、厩治郎なき後の淋しさが痛切に感ぜられる計りである。この一幕ものや、故大森痴雪氏改作

のものでなしに、正眞の「いろは新助」の狂言は松島や、老松町の端芝居では出たことはあるが、道頓堀では私の親天明治の末年に中座で演ぜられたのが恐らく最後のものであつたかとおもふ。その時は鷹治郎の新助に、故雀右衛門のいろはで、あの徳庵堤の駕を中にしての情景こそ、青年期に見たまゝで幾十年後の今日になつてもまざ／＼と眼に残つてゐるのを見ても、そのドンナものであつたかゞ知れやう。昨年二月の鷹治郎追善興行に「いろは新助」が出るときいて、イカに期待したことか、昔戀しく憶れ心地で見物したとか。

三月は新派創立五十年記念興行に東京新派の婦系圖で、湯島天如の場が泉鏡花の原作になくて、後でこの一場だけが出来たものであり。河合のお蔭は丸番の型を持つて出たのに、喜多村は障子紙を買ふて来た意味で持つてゐるのは、一層こ

の場面の哀愁を咬るのに効果的で、花柳も、水谷も、この型にならつてゐるなどゝ、いろ／＼なことに興を寄せられ、殊に初演以來の喜多村が一生一代の意味からも、文句なしに見物した。五月には三代目歌右衛門追善興行で、歌右衛門、吉右衛門等の大阪歌舞伎座初出演があつたが、私は寧ろ文樂座に土佐太夫の引退興行の詰りもの帯屋にひかされるものがあつた。

神戸では左團次一座打あげ後を、七月には菊五郎が乗込んで御殿のお三輪や、關扉の關兵衛、四千兩の富藏を見せたが、前年の「勘平の死」のやうな感銘はなかつた。十月には前進座が角座に進出しての一日三回興行に注目を惹き、大阪歌舞伎座では壽三郎、魁車の「藍染川」に好感が持てた。十一月にはお染久松の道行に、芳子のお染に勘彌が久松をつきあふてゐたが、お染は同じ芳子であつて

も、先年同じこの座で親た宗十郎の久松が、今に眼にあるのが邪魔をした。

十二月は京の顔見世で、羽左の見るからに均整のとれたいろ舞臺には、鷹治郎なき後の歌舞伎俳優らしい俳優として最う後にはあるまいと、頭の下る心地で梶原を見、當座を見物した。勘進帳で幸四郎の辨慶と、二人を同じ舞臺に見るにつけ、ふと東京神田に未だ東京座があつた頃、若かりし家橋、染五郎時代、二人道成寺で二人が鏡演に人氣を沸してゐた昔の舞臺がおもひ出されて来て、座席へ縮緬の手拭を投げかけてゐた姿さへも見へもするやうで感慨深いものがあつた。

次は劇壇に對する希望であるが、この際ともかくも時間の短縮と、低料金の問題を解決すべきで、事變關係が刺激してこの方面に對する業者の意向は分とめるべきものもあるが、更にその後の景氣の盛返しに遅後状態に入らざるやう注意さ



したい。この機会に、モット〜大衆と
 手を握り、面白い芝居を、安く見せると
 いふ、劇の普通化に努め、層一層演劇報
 國の賞があげられることを期待する。
 最後に大阪歌舞伎に一言する。何時も
 延若、梅玉、魁車、壽三郎と身上の底を
 その都度にはたいて、後に続くものがない
 といふのではどうかとおもふ。遅れた

りといへども若手の養成によく指導者を
 つけて一段の努力を拂ふならとおもふも
 のだが如何。目下のところは吉三郎、延
 三郎あたりを起用して、土地に居つた
 のを幸ひに小太夫、錦吾等にも應援させ
 低料金と、脚本の選擇、指導、宣傳のよ
 るしきを得たら、存外見られるものだ
 とおもふ。

道頓堀の

一ケ年 三圓三十錢

(郵税共)

お申込みは編輯部へ

月極め講讀

洋酒・食料品・罐詰屋

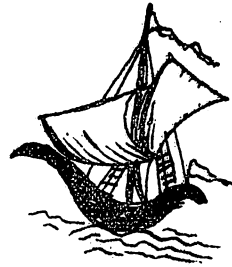
株式會社

横山商店

大阪市東區豊後町三番地

創業明治五年

電話東94代表三八六五番
振番口座大阪二八四七番



左團次の代役

坂本猿冠者

京都南座の顔見世で、左團次が急病で欠勤となつたため、乃木將軍は幸四郎、鳥邊山の半九郎は仁左衛門が代役をする事となつた。

左團次は猿之助ほど頑強ではないが、若い内からあの體格の持主として、實によく奮闘した。暑さ、寒さにも閉口垂れず、十二ヶ月ぶつ通して稼いだものだ。其結果が神田の駿河臺に七十五圓の借家人であつたのが、同じ駿河臺に豪壯な邸宅を新築して、今日の左團次をも築き上げたのだ。

併しとる年には勝てないので、此頃はだいたい弱くなり、舞臺の活氣も氣の故か薄らいだやうに思はれる。

左團次が病氣になつて、芝居を休んでしまつたのは、大正十二年の一月、本郷座で倒れた時であつた。狂言は岡先生作の「今様薩摩歌」であつた。(この月は明治座へも掛け持ちで、やはり岡先生の「天竺徳兵衛」を演つてゐたが、この方は壽三郎が代役した)

病床で代役は誰が演つてると聞いた時、これも先年死んだ鶴藏が源五兵衛を代役に演つてゐると云つた、鶴藏に演らせるなら、死んでもいゝ乃公がやると云つたので、急に芝居を休んでしまつたと、其頃諷か、誠か知らないが噂されたものである。そんな事には無關心なやうに思もはれる左團次が、案外傳統的の事に關心を持つてゐる事を私は其頃不思議に思つたことだ



實川延若 辯

昭和十二年度で先づ特筆すべき事は、

十二月興行忠臣藏で地方巡業をした時の市川箱

登羅氏の鷲坂伴内です。

實に無類の上出来で伴内役者としては、第一人者でせう、後進俳優の良きお手本とも成るで

せう、この十二年度の掉尾を箱登羅氏の伴内で飾り寅年の新春を迎へるとは、誠に芽出度い事

です、そこで由良之助役の小生より伴内役の箱登羅氏に一献参らせ度い。

寅まへて酒吞ませう

幸四郎（この優もなか／＼頑強組の一人）が先年急病で、歌舞伎座を中途で休んだ時に、名和長年を左團次が代役で勤めたのを私は思ひがけなく見る事が出来た。幸四郎とは別な左團次の長年を興味深く見物出来た。

長年と云ふ役は左團次でも出来る役だから、幸四郎の長年に對して左團次が長年を演るとしたら、見物を呼ぶ事が出来るのだが、幸四郎當り役の長年を、左團次が傳統的な事に物堅い優だけに、恐らくは上演しまし。

それを偶然にも同座してゐて、代役を勤める事になつた爲め長年を演る事になつたので、私は本當に思ひがけなく左團次の長年が見られた事を幸福と思つてゐる。

又幸四郎の乃木將軍は左團次でなければ此優のものだ。はからずも先年の返禮に乃木將軍を幸四郎が演る事になつたのは不思議の因縁とも云へやう。

半九郎を仁左衛門が代役になつたのは開場前から二人半九郎と噂された位、仁左衛門の源三郎は半九郎になりはしないかと好劇家から云はれてゐた位だから、左團次の半九郎の代役として適當かもしれぬ。今度も左團次は、仁左衛門が半九郎を演るなら、死んでもいゝから乃公が出て演ると云つたらうか。なんと云つても松島屋だ。眞逆に左團次もそんな駄々はこねなかつたらう。



編輯を終へて

源 多 生

▼皇紀二千五百九十八年

輝く新春を迎へ謹みて皆様と共に、萬々歳を申し上げます。

▼軍國の春、躍進皇國の瑞祥充ち満つ今日こそ、全くおめで度いかざりてあります。

▼一年ぶり、またお目にかゝるの機會を得ましたボクは更に喜びにひたつてをります。

▼御執筆下さいました諸先生には、たゞのあはたゞしきでない年末かけて随分御無理を申し上げます。

しかも、何れにも御好意を賜はりまして、全くお禮の申上げやうありません。

▼それにもかゝはらず、ボクの仕事の一つである浪花座の宣傳の方が、新春と共に思はざる多忙を極めましたために、せつかくのメイ・プランも、意にまかせなかつたものがありこの點、申譯けない次第だと存じてゐます。

▼そのかはり、二月號はグンとよくして、グンと早く出して、グンと皆様にはめていたゞくお約束が出来ます。

▼どうか、來月號をお待ち下さいませ。

お知らせ

◇來月號から讀者欄を新設いたします、投稿自由……、全く自由……。
◇用紙はハガキで、編輯部宛のこと。

昭和十三年一月十五日發行
月刊『道頓堀』第十三年
雜誌『道頓堀』第百廿六輯

◇誌代は前金お拂を願ひます。
◇郵券代用は一割増にて御註文を願ひます。
◇御相談の上廣告掲載の體に應じます。

廣告取扱所

大阪電報通信社
大阪府北區中之島三丁目
廣告の御用は電通または當編輯部廣告係へ御申越下さい。

部一 金三十拾錢(郵錢五厘)稅

昭和十三年一月十五日印刷
昭和十三年一月十五日發行

大阪府南區久左衛門町八番地
松竹興業株式會社大阪支店
發行者 島江 鏡也
編輯者 松本 泰三
印刷所 道頓堀社印刷部

大阪府南區久左衛門町八番地
松竹株式會社大阪支店
發行所 道頓堀編輯部
京都支店
京都市姉小路東洞院西
大橋 孝一 郎方

あぶら取紙始礎 辻占添附

スキナあぶら取紙

姉妹品

スキナ紙白粉 スキナ石鹼

專賣特許 審用新案

スキナ御化粧紙

(あぶら取兼紙白粉)

各品共御愛用を乞ふ!

標商録登



大 阪
發賣元 朝日堂株式會社
本舖 大 阪
中田スキナ屋謹製



昭和十三年十月廿五日第三種郵便物認可
昭和十三年十一月十五日發行(每月百卷回)

品作船大竹松

新家庭曆

夫正藤齋・影撮 伴喜瀬長・本脚 寛池菊・作原

品作 督監 宏水清



篇色異の載連部樂俱人婦

「新家庭」

第十三年 第百三十六卷

一部金參拾錢



桑野通子
佐分利信子
高峰三枝子
主演

岡村文子
坂本眞子
奈良眞子
楓英子
近衛敏子
助演

部畫邦社會式株竹松